文學士 天野爲之講述

萬國歷史 全

版權所有

大日本中學會

萬國歷史

文學士　天野爲之講述

中世史緒說

紀元四百七十六年、羅馬西帝國忽諸として滅びぬ。是時より紀元第十五世紀の終に至るまで、凡そ一千年間を中世とはいふなり。即ち我朝にては、雄略天皇の二十年より、足利氏の末葉に至る。思ふに中世の初に於てや、蠻族到る處に跋扈跳梁の勢を逞しうし、咆哮大呼、事とする所は侵掠のみ、務むる所は破壞のみ。社會は一旦渾沌たる狀況に陷り、四方冥々、白日光なく、舊時の文明、煙散霧消して、復た何れの處にも痕跡を留めざるが如き觀を呈したり。然るに天運循環、往いて還らざるなく、この紛々亂雜の裏に、近世の文明、次第に其萌芽を發生し、諸國に割據せる日耳曼種

族は、漸く羅馬の宗教制度を採用するに至り、蠻族固有の思想風俗、自らと融和混合し、元氣斯に新にして、世態斯に盛ひ、かくて歳月と共に進行して息まず、終に第十六世紀に於ける歴史上の舞臺に、燦爛たる花を開きたり。されば中世は、文明の準備時代とこそ、稱すべけれ。而してこの間、社會の秩序稍や整頓し、人文發達の色を現はしゝは、第十二世紀以後なるにより、その前六百年間を、普通稱して闇世となす。

今中世史を說述するに先だち、玆に每一百年間の重なる事實を揭げて、讀者に梗概を知らしめ置くも、强ち無益のわざにあらざるべしと信ず。

第五世紀の半頃に於ては、ブリタン島の海岸に「アングル」人「サクソン」人始めて居住を取れり。第六世紀に於ては、拉丁語漸く轉訛して、佛蘭西語、伊太利語、西班牙語、となれり。又「ベネデクト」宗徒の僧侶、寺院の嚆矢を建てたり。第七世紀に於ては、マホメット新に教門を唱へ「サラセン」軍の運

動乃ち起れり。第八世紀に於ては、「チャールスマルテル」「セラセン」の兵鋒をツールに挫き、以て耶蘇教國の厄難を救ひし事あり。此際又「スラボニヤ」人、漸く歐洲東部に鋒鋩を露はせり。第九世紀に於ては、羅馬法王政治界に威を振ふに至れり。第十世紀に於ては、「ノルマン」人の勢、猖獗を極めぬ。封建制度は確乎樹立の運に向へり。第十一世紀に於ては、日耳曼帝と羅馬法王との間に、一大葛藤あり。土耳古人ゼルサレムを取りて、十字軍斯に起れり。第十二世紀に於ては、封建制度極盛の點に達し、騎士の世の中となりぬ。伊太利の共和都府は繁榮し、佛蘭西の國威は發揚せり。第十三世紀に於ては、近世市府の勃興あり、貿易製造銀行の業次第に盛なり。羅馬教に反對を試みるものも出で來れり、從つてかの不信者虐待の擧も起れり。但し此際法王の權力は、其最高度に達したり。第十四世紀に於ては、人智の進歩著しく、英國、佛國、伊太利、日耳曼、各自其國の文學を有す

るに至れり。羅針盤は航海發見に便利を與へ、火藥の使用は戰況を一變せり。羅西の共和國は成立せり。封建諸侯の勢力は、各國君主の權威增加するに從つて、衰微したり。第十五世紀に於ては、地理上未曾有の發見あり。之と同時に、印刷術の發明あり、希臘拉丁文學の回復あり、思想は自由に向ひ、商工業者は社會に勢力を得、法律秩序世に行はれ、無形的及び有形的の文明、光を放ちて、歴史上の一大段落を表示せり。

第一章　歴史上の新種族

さて羅馬西帝國は、多年氣息奄々たるの末、遂に墳墓中のものとなりぬ。其後に於て、嶄然歴史上に頭角を現出せるものを、「チユートン」族、「ケルト」族、及び「スラボニヤ」族とす。而して三者の中、最も歴史の大流に關係あるは、「チユートン」族なり。「ケルト」族は、「ブリチシユ」諸島、「ゴール」、西班牙及び伊

太利に點々散在して、其勢萎微振はず。「スラボニヤ」族は、歐洲東部の大野を占め、その强大なる狀を呈せしは、遙に後年に在り。

「チユートン」族の重なる區別を擧ぐれば、曰く「ゴツス」人、曰く「バンダル」人、曰く「フランク」人、曰く「バルガンヂヤ」人、曰く「ロムバルド」人、曰く「アングル」人、曰く「サクソン」人、曰く「スカンヂナビヤ」人、是なり。「ゴツス」人は、東「ゴツス」及び西「ゴツス」の二者に分れ、「スカンヂナビヤ」人は「ノルスマン」又「ノルマン」と稱す。此等の諸人種は、中世の初つ方に於て、如何なる事を爲しゝか、請ふ左に之を畧記せん。

「ゴツス」人及び「バンダル」人

東「ゴツス」の王なるテオドリツクは、伊太利王オドアカーを攻破して、伊太利を領したり。その政を爲すや、宜しきに合ひ、羅馬の法律制度等、一切舊に遵ひしかば、國内の秩序紊れず、人民皆其堵に安んぜり。有名の學者

政治家なるカシオドラス等の出でしは、實に此時なり。西「ゴッス」人は、西班牙、葡萄牙、及び南部佛蘭西に亘りて國を建て、爾來二百年間繼續したり。「バンダル」人は、羅馬滅亡前、西班牙に國を建てしかど、其後西「ゴッス」人の來襲に遇ひ、逐はれて亞弗利加に渡り、其北岸に國を建て、カルセージを中心としたり。

「フランク」人及び「バルガンヂヤ」人

第五世紀の末より、第六世紀の初に於て、「フランク」人は、其王クロビスを戴き、ゴール地方の北部を征服し、「フランク」王國を立つ、此即ち佛蘭西の起原なり。佛蘭西の第一王系なる「メロビンヂヤン」は、クロビスより始まれり。王妃クロチルダは、耶蘇教信者なりき。クロビス及び其配下、遂に之に化せられて、洗禮を受くるに至れり。「バルガンヂヤ」人は、ゴール地方の東南に國を立てしが、「フランク」人のために征服せられて、一時其影を失へり。

「アングル」人及び「サクソン」人

第五世紀の半頃より、日耳曼のエルベ河、及びウエサー河邊に住せし「ナユートン」族の蠻民、海を超えて、ブリテン島に移住を試み、次第に原住者なる「ブリトン」人(「ケルト」族なり)を一隅に放逐して、其土地を奪ひ、勢力を振へり。此等の蠻民は、即ち「アングル」人、「サクソン」人、及び「ジユート」人にして、共に合して一國民を成し、「アングロ、サクソン」人と稱す。而してブリテン島の名をイングランドと變ぜしは、「アングル」人の土地といふより來れるなり。

「ロムバルド」人及び「スカンヂナビヤ」人

「ロムバルド」人の日耳曼森林より出でゝ、伊太利に國を建てしは、第六世紀の半頃なり。又「スカンヂナビヤ」人の盛に北海に横行して、英佛の海岸

を侵掠し、歴史上に其名を現はしゝは、第九世紀より第十世紀頃の事と知らる。

「ローマンス」語及び其他の言語

「チユートン」族の伊太利ゴール西班牙を征服せしや、此等の地方に於て、最も行はるゝものは拉丁語なりき。「チユートン」族の言語、次第にこの拉丁語と混合して、一種の言語起り、普通人民の間に使用せらるゝに至りぬ。此は所謂「ローマンス」語にして、南方佛蘭西の「プロバンス」語「フランス」語、「スペイン」語、「イタリー」語、即ち是なり。ブリテンにては「チユートン」語その純粋を維持し、第十一世紀の「ノルマン」征服に至るまで「ローマンス」語の感化を受くることなかりき。

歐洲中部の日耳曼人、及び和蘭人等の言語は、少しも拉丁語の影響なく、微頭微尾「チユートン」派の言語なり。丁抹人、瑞典人、那威人(三者皆「スカンディナビヤ」人なり)の言語も亦然りとす。さて又露西亞人、波蘭人等の如き「スラボニヤン」族の言語は、其性質自ら一種特別にして、「ローマンス」語にも非ず、又「チユートン」語とも異れり。「ケルト」語に至りては、現時其行はるゝ區域極めて狹く、僅にウエールス、ブリタニー及び蘇格蘭の山地にて用ひらるゝのみ。

第二章　中世の初期三百年

第一　東羅馬帝國

東羅馬帝國は、希臘帝國とも、又「ビザンチン」帝國ともいふ、西帝國の滅亡後、約そ一千年間命脈を維持したり。但し歐洲の新國民漸く頭角を現し、新文明漸く光輝を放つと同時に、東帝國の運命は、次第に衰微に向ひ、終に孤城落日の有樣に至り、千四百五十三年「オトマン」土耳古人の鋭鋒に

よりて、齟齬とせられたり。

さて東帝國の權力と榮光とに於て、最高の點に達したるはジャスチニヤン帝の時なりとす。(帝の在位は、紀元五百二十七年より、五百六十五年に至る)有名なる「セントソフィヤ」の大寺を、コンスタンチノープルに建てしは、此帝なり。又首府の周圍、ダニューブ河畔、其他邊境各處に堡塞を設けしは、此帝なり。殊に羅馬法典編纂の業を成し、以て歐洲諸國に模範を與へしは、實に此帝なり。右編纂の際、主任となり、最も力を盡した人をトリボニヤンとす。羅馬諸帝の律令を整頓したるもの、之を「コード」といひ、羅馬法律家の諸說を網羅したるもの、之を「ダイゼスト」又は「パンデクト」といひ、羅馬法律の原理を擧げたるもの、之を「インスチヽユート」といひ、「コード」編纂後、ジャスチニヤン帝の新に制定せし法律を輯めたるもの、之を「ノベル」といふ。羅馬法典とは、以上四者を總稱せるものなり。

帝の世に於て、商工業上特に記錄すべき要件あり、即ち蠶の輸入是なり。元來養蠶の業は、東洋の商人之を秘密に付したるを以て、歐洲人は久しき間、絹は綿と同樣に、植物より生ずるものと爲したり。然るに適ま二人の宣教師、支那に赴き、養蠶の實況を視察し、竊に蠶卵を其杖中に收め、長途の旅行、備に艱苦を嘗めて、コンスタンチノープルに歸り來りしかば、是より養蠶の業、東羅馬帝國の內に行はるゝに至れり。

ジャスチニヤン帝は、國內種々の改良を計ると同時に、大に兵力を外に耀かし、版圖を擴張したり。有名なる將軍ベリサリユス、軍を率ゐて亞弗利加に至り、「バンダル」王國を滅ぼし、又シヽリー島を從へぬ。次でナーセス、ベリサリユスに代りて征討の將軍となり、伊太利に向ひ、東「ゴッス」王國を覆へし、伊太利全國を東羅馬の領地となしたり。爾後伊太利は、ラベンナ太守といへる東羅馬帝の一官人、之を治む。而して此際又東羅馬は、西

ゴッス人より西班牙南部の地方を奪ひしかば、其版圖は一時殆んど地中海を圍繞し、東はユーフラテス河より、西は太西洋に及べり。ジャスチニャン帝は、紀元五百六十五年に崩じ、幾程もなく事態の一變を來したり。

五百六十八年に於て、ロンバルド人、日耳曼パンノニヤ地方より出でゝ、アルプス山を越え、北部伊太利の沃野を取り、一王國を立つ、ロンバルディといふ地名は、是より起りしなり。其後殆ど二百年間、ロンバルト王は、ラベンナ太守と伊太利を分轄せしが、査列曼帝の爲に亡されぬ。ロンバルド人侵襲に關聯して、一の注目すべき事件あり、即ち後年地中海上商業の大權を握り、富貴繁榮四隣に冠たるベニス府の發達是なり。蓋し西羅馬帝國の末造に當り、ハン人伊太利に跋扈し、人民其害をアドリヤチック海頭の島嶼に避け、斯にベニスの起原をなしゝが、ロンバルド人南

進の際も、其暴掠を免れんとて、此島嶼に逃走するもの多く、其結果遂に一都を成すに至れり。

爾來東羅馬は、北の方スラボニヤン族の刼掠に遇ひ、東の方波斯人土耳古人等の襲擊を受け、西の方ゴッス人の爲に西班牙南部を奪はれ、既にして、サラセン人の大侵畧を蒙むり、コンスタンチノープルも再三の圍攻に苦しめられ、版圖次第に縮小せり。此間諸帝の中、或は決起して、衰運の挽回を計るものありと雖も、暫時にして國勢復た屈し、到底如何とすべからざる有樣なりき。一國の元氣は何時しか消亡し盡き、上下姑息に流れ、目前の小康を貪ぼりて、百年の大患を等閑に付するもの比々皆是なり。されば其後東帝國の歴史は、微弱のみ、叛亂のみ、宮中の騷擾のみ、智德の壞敗のみ、歴史中に大書特書すべき事とては、毫も之なしと謂ひて不可なきなり。

第二　佛蘭西の起原

先きにも說けるが如く、「フランク」人は「クロビス」を戴き、「ゴール」地方の北部に國を立て、佛蘭西の起原をなしたり。「クロビス」王は、紀元五百七年に於て、都を巴里に定め、王統の基業を開く。然るに「クロビス」の歿後、王國の歷史は、暗君愚主の非行罪惡を以て紛々たるもの、百數十年間、終に王權全く地に落ち、「メーヨル、オフ、ゼ、パレイス」といへる宰臣、政治上に威勢を逞しうするに至れり。此宰臣は、貴族中より選拔せられて、輔弼の任に當るものにして、兵馬の大權其掌中に在り。されば國王は唯た深宮の中に垂拱して、成を仰ぐのみ、是に於てか無爲王の名起る。此宰臣の中、最も有名なるものを「チャールス、マルテル」とす。紀元七百三十二年「ツール」の野に於て、大に回敎軍を破り、以て歐洲耶蘇敎國の厄運を救へり。「チャールス、マルテル」の子、「ペピン」宰臣と爲るに及び、「メロビンヂャン」最後の王なるチルデリックを寺院に幽閉し、自立して王となり、次で羅馬法王の公認を得たり、之を紀元七百五十三年の事とす。「カーロビンヂャン」王統斯に始まれり。

第三　英吉利の起原

「アングロサクソン」人の「ブリテン」島に來るや、七王國を建つ、之を「ヘプターキー」と稱す、「ケント、サセッキス、ウエセッキス、エセッキス、イーストアングリヤ、メルシヤ、ノルサンバーランド」是なり。この七國互に首長たらんとを爭ひて、戰鬪止む時なかりしが、紀元第九世紀の初に於て、「ウエセッキス」の王「エグバート」終に他の諸王國を從へ、統一の業を成就し、英蘭王となれり。

「アングロサクソン」人の耶蘇敎徒となりしは、「オーガスチン」の盡力によ

れり。オーガスチンは、紀元五百九十七年、法王グレゴリー第一世の命を受けて、ブリテンに來りしが、布教其効を奏し、ケントを始として其他の諸國次第に改宗するに至り、遂にオーガスチンは第一のカンターバリー大僧正となれり。

第四　「サラセン」人の勃興

余は今や、中世の一大事件なる新宗教の發生と廣布とを說述せんとす。顧ふに彼の唯一神の道を人間に教ふる世界の三大宗教は、皆「セミチック」人種より出づ、第一に猶太教あり、第二に耶蘇教あり、而して最後に現はれたるものは回教なり。回教の始祖は、マホメットにして、亞拉比亞人なり。「サラセン」人(東方人といふ意)即ち亞拉比亞人は、實に「セミチック」派に屬せり。

マホメット(又モハメッドともいふ)は、紀元五百六十九年亞拉比亞のメッカに生る。幼にして牧羊の業に從ひ、壯に及びて商事に身を委ね、パレスタイン、シリヤ等に旅行すること屢なりしが、其際蓋し猶太耶蘇兩教僧侶より、宗教上の知識感念を得たり。爾來寂寞無人の山間に退き、沈思靜謐に日を送ること久しく、終に一點の光明、心裏に燦然たるを覺ゆるに至り、自から稱して、神託を受けたる預言者なりといひ、世に公言すらく、猶太耶蘇の兩教、共に上帝より出でたるものなりと雖も、余は一層完全なる宗教を上帝に授かりたり。亞拉比亞人の宗教を改良するの任は、降りて余の頭上に懸れりと。時にマホメット、年四十なりき。然れども、メッカの人民、マホメットを目するに狂人を以てし、非難攻擊四方より起りしかば、マホメットは、身を脫してメディナに逃走したり。正に紀元六百二十二年七月十五日にして、此時を「ヘヂラ」(移轉の意)と稱し、回教の紀元とす。

(推古天皇三十年)メヂナに於ては改宗者漸く多く、是よりマホメットは、劍戟の力を以て新宗教を廣めんとに志しぬ。かくてメッカは、第一に攻擊の目的となり、數年ならずして、亞拉比亞半島全くマホメットに從ひ、回教を奉ずるに至れり。マホメットは、亞拉比亞のみの預言者たるを以て滿足せず、尙全世界の預言者たらんと欲し、半島以外に其勢力を擴張すべき準備に從事せし際、熱病に罹り、紀元六百三十二年メヂナに死せり。

實にマホメット出でゝ、亞拉比亞人偶像禮拜の弊習は、掃蕩せられたり、法律及風俗は、一新に向ひたり、四分五裂の諸部族は、結合せられたり。マホメットは、其教旨儀式等を筆して、一部の書を成せり。之を「コーラン」(讀み物といふ意)と稱す「コーラン」は、回教徒以て宗教上のみならず、政治上の金科玉條となす。

マホメットの後繼者を「カリフ」(嗣王といふ意)と稱す「カリフ」は政治上並に宗教上の首長たり。第一の「カリフ」を、マホメットの義父アブベーカルとす。是より數世の「カリフ」、皆能くマホメットの志を承け、新教の廣布に力を盡しゝかば、其成功實に驚くべき程なりき。「カリフ」等の軍を進むるや、猶太耶蘇兩教の信徒に向ふては、曰く「コーラン」經を受理するか、貢賦を納るゝか、又は生命を失ふか、三者其一を擇べと。他宗教の信徒に對しては、曰く回教を奉ずるか、又は劒及に觸るゝか、二者其一を擇べと。かくて「サラセン」人はシリヤ埃及を從へ、小亞細亞波斯等を征服し、又亞弗利加の北岸全體を戡定し、尙ジブラルター海峽を渡りて、西班牙の西「ゴッス」王國ヲ顚覆し、紀元第八世紀の初には、新月の旗、東は印度地方、西は太西洋岸に揚々たるに至れり。是に於てか「サラセン」人は、ピレニース山を越え、ゴールに侵入せり。此時や耶蘇教國危急の秋にして、チャールス、マ

ーラルの剛勇、能く奇功を奏するとなかりせば、歐洲諸國は回教軍に蹂躙せられしならん。戰爭の間、實に七日に彌り、「サラセン」人全く敗れ、大將アブダラーマン陣歿したり。

此「サラセン」征服の大版圖は、暫時の間一「カリフ」によりて支配せられしかども、「カリフ」の位に就きて爭亂起り、紀元七百五十五年帝國分裂して東西二國となれり。西の「カリフ」は「オンミヤド」系統にして、西班牙を領し、コルドバに首府を定め、東の「カリフ」は「アバシッド」系統にして亞弗利加北部及び東國を領し、初めダマスカスに首府を定め、後バグダッドに徙れり。バグダッドはチグリス河の西岸に位し、當時歐亞貿易の大中心たり、六百道の運河、縱横に府内を貫通し、數千の寺院、巍々として壯觀を飾る。其王宮の如きは、亞細亞人工の粹を聚め精を窮め、華麗目を眩する許なりき。

バグダッドの「カリフ」中、最も著名なるものを、アーロン、アル、ラシッドとす。諸君も知れる如く、かの「アラビヤン、ナイト」といふ小說中に、此王の生活、並に當時の狀況は描出せらるゝなり。然るに其後土耳古人「カリフ」の讐術として使用せられしより、此兵士は羅馬の「プレトリヤン、ガード」と一般なるに至り、暴横を極めたり。同時に帝國の諸州解體して、土耳古人各地に獨立國を建て、名目上のみ「カリフ」に屬するもの、其多きを加へ、宗教上の分裂又起り、各派互に相敵視せり。かくて紀元第十一世紀の頃には「セルジユキヤン」土耳古人、全く帝國の主權を掌握し、バグダッドの「カリフ」は、單に宗教上の首長たるに止まることゝなり、而して千二百五十八年、蒙古人のために此帝國終を告げ、土耳古人の勢力も亦打破せられたり。

西班牙の方は、第十世紀の半頃、アブダラーマン第三世といふ「カリフ」の

時に、最も強盛の域に達したり。其後國内紛亂生じ、千三十一年「オンミヤド」系最後の王廢せられて、西班牙は數多の小なる回教王國に分れしが、幾程もなく「ムール」人亞弗利加より來り、諸國を結合して、斯に南方西班牙に「ムール」王國を立つ。但し北部に於ては、ナバール、アラゴン、カスチル、レオン等の耶蘇教國あるなり。

亞拉比亞人は、元來學問技術の門外漢なりしが、軍事上の成功と共に文運の進歩著しく、希臘及び亞細亞の開明を學び、又之を普及せしむること尽に盡力したり。大都を起し、商工業を奬勵し、學校を建設すると夥しく、「サラセン」帝國の面目、暫時にして一新したり。其結果として「サラセン」人は、中世の文明史に至大なる關係を有せり。此事に就ては、尙後章に說く所あるべし。

第三章　シャーレマンの帝國

紀元七百七十一年ペピンの子、シャーレマン父に次いで「フランク」の王位に登る。此王は、歴史上最も著しき人にして、武略比なく、政治の才に長じ、又學者としても非凡なりき。

シャーレマンは、實に四圍亂雜紛々たりし國民及び制度を統同混一して、以て强盛なる帝國を成したり。在位の間兵を用ふること、大小五十餘戰に及び、東の方は「サクソン」人、「デーン」人、「スレーブ」人、「バワリヤ」人、「アバー」人等を征し、西の方は、西班牙の「サラセン」人を攻め、又南の方は法王アドリヤン一世の請に應じ、伊太利に入り、「ロンバルド」人を破り、其王デシデリユスを廢して、「ロンバルド」の鐵冠を戴きたり。かくてシャーレマンの即位より、三十年許の後に於ては、其版圖、西班牙の東北部「ゴール」全體、日耳曼の過半、及び伊太利の北部中央部を包括せり。

紀元八百年(桓武天皇延暦十九年)耶蘇生誕の日に於て、シャーレマンは、羅馬の(セントピーター)の敎堂に詣り、神壇の前に跪き、祈禱を捧げつゝありし際、法王レオ三世、突然起ちて、萬衆歡呼の裏に、羅馬皇帝の冠をシャーレマンの頭上に加へたり。是に於てか西帝國滅亡後、三百餘年間全く絶えたりし帝位は、フランク王によりて復興せられたり。

さてシャーレマン帝の施政は、決して古昔羅馬皇帝專制の爲に倣はず、配下の諸國民をして、各自の法律を奉じ、各自の君長を戴き、又各自の集會を續行せしめ、之と同時に、地方に對する中央政府の監督は、到らざる所なく、常に按察使を各州に派遣し、弊害の矯正を計り、實況の報告を爲さしめたり。

シャーレマンの精力過絶なるは、殆ど人爲と思はれざる程にして、蓋し羅馬の英雄シーザルに比すべきか。其在位中干戈の聲絶年絶えず、兵馬

倥偬、軍務多端を極め、衽席暖なるに遑あらざりしが、胸中綽々として、自ら餘裕の存するあり、兼て又帝國施政の改良と、社會の進運とに、意を注ぎ、諸般の土木を作興し、さては文學を奬勵し、(フランク)古歌の編纂などにも從事したり。帝は各國より名ある學者を召集せしが、中世英國學者の泰斗たるアルキンの如きその選中に在り。此人は希臘拉丁猶太三國の語に精通し、文事上に於て、シャーレマンの重なる師友なりき。

シャーレマンは、身體長大にして、且極めて强壯なりき。衣食住に至りては、平生質素儉約を旨とせり。容姿儼然として畏敬すべきも、人に接する際、和氣藹然、掬するに足るものあり、遊戲中最も水泳を好み、其都エーラ、シャペルには、大なる水泳場を設けたり。帝は在位四十三年にして、紀元八百十四年に死せり。

第四章　シャーレマン帝國の分裂及び爾後三

百年間の歐洲諸國

シャーレマン死して、末子ルイ次いで「フランク」帝となる。然れども性柔弱にして、かゝる大帝國を統御すること能はず、版圖漸く分裂の徴候を現はすに至りぬ。ルイ死するに及び、其三子互に領地を爭ひ、紀元八百四十三年バーダンの條約によりて、帝國終に三分せり。即ちルイは、東「フランク」國を領し、チャールスは、西「フランク」國を領し、而してロタールは、伊太利並に東西「フランク」の間に介在せる狹長なる土地を領し、且帝號を有したり。但しこの狹長なる土地は、速に東西「フランク」の爲に分領せられぬ。東「フランク」國は、即ち日耳曼なり。西「フランク」國は、即ち佛蘭西なり。其後東「フランク」のチャールス肥王の時、三國復た一に合せしが、紀元八百八十七年帝國再び分裂することゝなれり。

○日耳曼に於ては、幾程もなく「カロリンヂャン」王統絶えしかば、諸侯

相議し、「フランコニヤ」侯コンラッドを選擧して、王となす。是より日耳曼は、選擧王國となれり。コンラッド死して、「サクソン」系統之に代る。此系統の最も著しき王を、オット大王(紀元九百三十六年より九百七十三年に至る)とす。是時に當り、伊太利は分裂の狀を呈し、爭亂絶えず。大王乃ちアルプス山を踰えて、伊太利に赴き、ロンバルディを征服せり。而して紀元九百六十二年(村上天皇應和二年)には羅馬に於て法王ヨハン十二世より、皇帝の冠を受けたり。爾來耳曼王は、ロンバルデー王となり、且羅馬皇帝となるべき權利を有するに至れり。「サクソン」系統は、千二十四年に絶え、「フランコニヤ」系統之に代る。

(シャーレマンの帝國分裂後に起りしものなり、又アール王國とも稱す、其境土今日の佛國東南部及び瑞西を包む)を併せて、帝國の版圖を擴張

「フランコニヤ」系統の始を、コンラッド二世とす。此時バルガンデー王國

したり。コンラッドの子ヘンリー三世は、大に國内の秩序を整へ、法王の權力を抑へ、諸侯の跋扈を制し、且文學技術を奬勵したる帝なり。然るにヘンリーの後は、日耳曼帝と羅馬法王との間に軋轢絶えず、(後章に詳說すべし)爲に伊太利並に日耳曼に於て、叛乱内訌の禍頻なりき。殊にヘンリー四世の如きは、法王グレゴリー七世より非人視令(原語「エキスコンミニケーション」とて、人を教門外に放逐し、以て社會に立つを能はざらしむる所の處罰なり)を受け、窘迫の餘り、終に千七十七年法王の膝下に哀憐を乞はざるべからざるに至れり。この時帝は、法王の居城なるカノサ(北部伊太利の一地にてモデナに近し)に赴き、玄冬の候、寒威凜烈なるにも關はらず、裸頭跣足、外庭に佇立すること三晝夜に及び、然る後纔に法王の面前に謝辭を呈するを得たりといふ。「フランコニヤ」系統は、千百二十五年に絶え、諸侯「サクソニー」の「ロタール」を選んで帝となしゝが、帝

死して「ホーヘンストウヘン」系統之に代る。

○佛蘭西の方にては、八百八十八年「フランシヤ」公「オード」、諸侯の爲に推されて、王位に即きたり。爾來或は「オード」家より王を出し、或は「カーロビンヂヤン」家より王を出すこと、一百年許に亘りぬ。「カーロビンヂヤン」家は、「レオン」に都し、「オード」家は、「パリ」に都せり。然るに此際佛蘭西は、數多の侯伯各處に雄視し、王命の行はるゝ區域、至りて狹隘なりき。即ち「ロアル」河以北には「フランダー」「ノルマンデー」「ブリタニー」「バルガンデー」等あり、以南には「アクイテイン」「ガスコニー」「ツールース」等あり此等の諸侯、大抵獨立の狀を爲したり。さて「カーロビンヂヤン」王統は、ルイ五世を以て終を告げ、紀元九百八十七年「オード」の後裔「ユーカペー」選ばれて、王位に登り、「カペシヤン」王統斯に始まれり。此王統は、三百五十年間繼續し、其終に至りてや、佛蘭西は實に歐洲中に炳燿せる一强國となりしも、ユウカペ

川の嗣王數世の間は、王家の權力微弱にして、領する所は、唯だセイヌ河及びロアル河の中間僅少なる部分に止まり、諸侯跋扈の有樣依然たりき。

佛蘭西大諸侯の中に於て、「ノルマンデー」の歴史は、最も要用なるものなり。「ノルマンデー」なる州名は、北人(ノルマン)の之に住居せしより起れり。北人とは、即ち「スカンヂナビヤ」人にして、バルチック海の西北を擁する一大半島に住し、次でヨユットランドと稱する半島を占有し、此等の半島及び附近の群馬に於て、遂に丁抹那威瑞典の三國を立てたり。北人は剽悍前なく、戰鬪に長じ、シャーレマン帝在世の頃より、漸く佛蘭西日耳曼の海岸に寇害を試み、帝國分裂の後に及びては、其侵暴一層甚しく、セイヌ河及びロアル河の如きは、北人常に輕軻に乘じて、流に遡ぼり、沿岸の都府を抄掠せり。かゝりしかば、チャールス、ゼ、シンプル(「カーロビンヂャン」家の一王)終に其患に堪へず、紀元九百十一年セイヌ河口の一地方を、北人の酋ロルロに與へ、封じて諸侯と爲したり。此地方は、即ち「ノルマンデー」の名を得たるものなり。是より先、北人專ら無賴なる働作に從事せしが、佛國に移住せし以來、耕農の業務に力を盡し、しかのみならず、佛人の言語宗教及び習慣等を採用して、次第に文明の行路に向ひ、未だ幾ばくならずして、「ノルマンデー」は良好なる一國となり、「ノルマン」人の中より、最も勇武なる騎士、最も鋭敏なる政治家、又最も卓偉なる建築者等を出すに至れり。

○伊太利の事を說かんに、既に前にも述べたる如く、北部地方即ちロンバルデーは、第九世紀オット大王の時、日耳曼の版圖に入れり。但し南部伊太利は、當時尙東羅馬帝國に屬し、中部伊太利にては、羅馬法王、權力を振へり。第十一世紀の半頃、ノルマンデーのロベート、ギスカード、國人を

率ゐて、南部伊太利を從へ、次で「サラセン」人よりシ、リー島を奪へり。而して其姪ローガル二世、乃ち「ナープルス及びシ、リー王國(兩シ、リー王國とは即ち是なり)を建てたり。

○英國にては、紀元八百二十七年エグバート王の七王國を統一したり し頃より、佛蘭西及び日耳曼と同樣に、北人の侵害を蒙むれり。エグバートの孫アルフレッドの時に及びては、「デーン」人益々猖獗を極め、英王も曾て數名の臣下と與に、深林幽澤の中に遁逃して、纔に一生を得たる程の勢なりき。然れども、アルフレッドの豪毅なる、能く幾多の艱難を忍び、遂に奮つて「デーン」人を擊破し、以て回復の業を爲したり。其後エドガー王の時、國威大に張りしが、子エーセルレッド立つに及び、「デーン」人復た大舉して入寇し、英蘭全國之が爲に征服せられ、千十七年に於て「デーン」人の王カニユート、英王の位に登りぬ。カニユートは既に丁抹を支配し、

且那威及び瑞典を領有せしかば、歐洲北部、皆その命令を奉じ、當時に在りて、勢力最も盛なる君主なりき。而してうの英國を治むるや、施政宜しきを得て、人民皆悅服したり。然るに嗣王に至りて、駕御法を失ひ、英人その支配を厭ふの念を生じ、終に千四十二年に於て、エーセルレッドの子、エドワードを迎へて、王と爲したり。

「ノルマンデー」公ウイリヤムは、エドワードの親戚なり。英王子なきを以て、曾てウイリヤムに約すらく、己れ百歲の後は、繼で英王の位に即くべしと。然るにエドワードの死するや、英人は「ウエセッキス」伯、ハロルドを立てゝ、王となしゝかば、ウイリヤム大に怒り、法王アレキサンダー二世の認許を受け、大兵を率ゐて、英蘭に侵入し、ヘスチングスの野に於て、ハロルドと會戰し、全勝を獲たり。この際英王は流矢に中り、亂軍の中に陣沒せり。是に於てかウイリヤム、終に英王の位に即く、實に紀元千六十六

年の耶蘇降生日なりき。(後冷泉天皇治暦二年)但し英人倘は各處に反抗を試むるものあり、是より四年を經て、英國全く平定に就きしなり。かくてウイリヤムは、次第に英の大封重職を「ノルマン」人に授け、且後世子孫長久の計を定めたり。

「ノルマン」征服の一擧は、英國諸般の事態に大なる影響を及ぼしたり。王家の權力は、是より擴張せられて、爾來國内分裂の患少きに至り、數多の新思想、「ノルマン」人と共に入り來りて、漸く英の法律及び風俗に變化を與へ、大陸諸國との交通は、一層頻繁に赴き、文學は昌へ、建築術は進み、宗教上改良の點も少からざりき。又當初「ノルマン」語及び「サクソン」語、並び行はれて、一は上流社會の中に、他は普通人民の間に用ひられしが、二言語次第に相混淆して、遂に今日英語の根基を成し、上下一般に通ずるあるとゝなりぬ。

第五章　封建制度

各國の沿革を說くとは、暫く之を中止し、此より以下數章に於ては、中世歷史の眼目たる歐洲諸國共通の事實を述べんとす。その事實とは、曰く封建制度なり、曰く法王權なり、曰く十字軍なり、曰く騎士制度なり、曰く文明の變遷なり。先づ封建制度より始めん。

羅馬國に於ては、人に土地を賜與し、義務として軍役に服せしむるの習ありき。而して「チユートン」種族の中には、主從といふ特別の關係存在したり。以上兩者の思想相合して、斯に封建制度を胚胎せるなり。此制度は先づゴール地方に起り、紀元第十一世紀の頃には、十分なる發達を呈し、「チユートン」種族の征服したる諸國には、何れも行はれざる處なく、以て中世の終に至るまで繼續したり。

蓋しうの初め、日耳曼民族の相率ゐて、國土を征服するや、略取の土地を分ちて、各之を領有したり。之を「アロディユム」(私領)、又は「フリーホルド」といふ。即ち全然私有の土地にして、之を受くるものは、必要の場合に軍役に服するの外、何等の負擔をも蒙むらず、何等の義務をも有せざるなり。而して酋長の取る所は、勿論大にして、之を「フィスカル、ランド」(猶ほ御料地といふが如し)と稱す。かくて其後に至り、酋長は、其從者に或る特別なる義務(説明、後に在り)を課して、土地を與ふるの事起る。此等の土地は、初め「ベネフィス」の名ありしが、後には「フィーフ」といへり。封建君臣(「ロルド」及び「バッサル」)の關係、斯に生じて、臣下は一意君上に奉仕し、君上は十分臣下を保護す、是れ即ち封建制度の濫觴なり。「フィーフ」は、元來之を受くるものの一生に限りしが、幾ばくもなく世襲采地となりぬ。但し何れにしても、「フィーフ」の眞誠なる所有者は君主にして、臣下たるもの苟も其義務を

怠る場合には、直に沒收せらるゝなり。酋長既にかゝる方法を以て土地を人に與へ、かの「フリーホルド」を有する領主も、亦之に倣ひ、同樣なる約束を以て、其隷屬に土地を頒與せり。さて此等の「フィーフ」(封土)を受くるものは、更に己の所領を他人に授け、一方に於ては臣下の資格に在ると同時に、他方に於ては君主の地位に立つことゝなり、かくして社會の上層より下層に至るまで、君臣の關係一二にして止まらず、實に數多の階級を現出したり。抑も未開の社會に在りて、弱肉强食は世の常態なるを以て、小領主は特立してその土地を保有し、以て他の搏噬攘奪に遇ふの危險を冒さんより、寧ろその「フリーホルド」を强且大なる領主に納れ、之を「フィーフ」として領收し、以て臣下の義務に服し、以て君主の保護を受くるを便とするに至り、從て封建社會の區域、次第に擴張するおとゝなり、終には歐洲諸國、一の大なる封建社會を成すの觀を呈したり。又此制度は

獨り俗界に止まらずして、僧侶も亦國王より「フィーフ」を受け、之を武夫に頒與し、宗教界にも君臣の關係を見るに至れり。

封建制度に於て君臣の義を結ぶには、三樣の儀式を經るを要す。第一を「ホメージ」と稱し、臣下たるべき人は、帽を脱し、劔を帶せずして、君前に拜跪し、その兩手を君主の兩手に置き、自今以後身を君に捧げ、敢て貳心を抱かざるべき旨を約するなり。第二を「フィールチー」と稱し、僧侶の前に於て、臣下の當に盡すべき義務を怠ると勿らんとの宣誓を爲すなり。第三を「インベスチヽユーア」と稱し、君主より、臣下に向つて一塊の土又は一枝の木等を授け、以て「フィーフ」を與ふるの意を示すものなり。此等の手續を終りて、君臣の關係乃ち定まる。

臣下たるものゝ義務は、君に忠言を盡すに在り、君の秘密を露顯するに在り、君の身体財産名譽及び家族に害を加へず、又他人をして之に害を

加へざらしむるに在り。戰爭の際には、干戈を操りて、役に從はざるべからず、君危き時は、自命を拋ちて、之を救はざるべからず、君乘馬を失ふ時は、己の馬を君に奉ぜざるべからず、君敗れて擒にせらるゝ時は、己代りて敵中に往き、人質とならざるべかゝず。此等はその大略なりとす。

封建君主は、臣下をして以上の如き義務を盡さしむる外に、尙數多の利益を取る。例へば「レリーフ」(相續料)「エスチート」(沒收)「エイド」(献金)等の如きは是なり。「レリーフ」とは、「フィーフ」を相續するものより、君主に納るべき或る金額をいふなり。但し其金額の割合は、不定なり、時に大小の差違あり。「エスチート」とは、「フィーフ」の所有者死して、相續すべき血統存せざるときは、君主其土地を沒收するとなり。「エイド」とは、君の長男騎士に列するとき、長女結婚の式を擧ぐるとき、其他君家有事の場合に於て、臣下より上呈する献金なり。

此の如く君主は、臣下より種々の利益を得る代には、臣下を保護して、その「ブイーフ」を保有せしめ、之に附帯せる一切の特權利益を享受せしめ、又臣下と臣下との間に爭論起る場合には、裁判の勞を取るなり。

臣下は其義務を怠らざる以上、領内に於ける其權力は實に無限にして、言ふ所行はれざるなく、命ずる所從はれざるなく、宛然たる獨立君主なり。かくて、第十一世紀封建制度最盛の時に至りては、歐洲到る處に、此等の小君主碁布星羅して、其數を知らざる程なりき。此等小君主の下には、一團の人民あり、之を「セルフ」及び「ビレイン」の二級に分つ。「セルフ」とは、一種の奴隷にして、純粹の奴隷と異なる點は、その常に一定の土地に永住すると、之を賣買すると能はざるとに在り。耕夫工人等之に屬せり。「ビレイン」は、「セルフ」に比すれば、稍や上階に位し、地主に小作料を納めて、農事に從ひ、或は賃錢を取りて、僕役に服せり。

第六章　羅馬法王

コンスタンチン帝、耶蘇教を以て、羅馬の國教に採用せしより、耶蘇教廣布の勢頓に著しく、而して羅馬の僧正は、セントピーター(耶蘇の使徒中、第一の人なり。其昔傳道のため、羅馬に來り、ネロ帝によりて、セント、ポウルと與に殺されたり。)の相續者として、宗教上首長の地位を占め、漸く教會の組織を固め、羅馬帝國滅亡の後、世事紛然たるにも關らず、戰亂荐に起るにも關らず、教會の組織は、依然として其狀を變ずるおとなく、激浪怒濤の中に屹立せる巖石の如くなりき。羅馬の僧正は、「ポープ」(譯して法王といふ)と呼ばる。此語は、教父の義なる「パパ」より來れり。元來各地の僧正皆「ポープ」と稱せられしかど、グレゴリー七世の時、命令を出して、「ポープ」の名を羅馬の僧正に限りたり。

紀元第八世紀の頃、耶蘇教會は、東西兩派の別を生じたり。蓋し羅馬帝國

の分立より以來、教理儀式の上に於て、東西漸く或る差異を見ることゝなり、西帝國滅亡後、コンスタンチノープルの教長は、東羅馬の威を負うて、羅馬法王を凌ぐに至りぬ。既にして「イコノクラスト」の亂あり、「イコノクラスト」とは、當時耶蘇教國の間に普通なりし、偶像禮拜の習を破らんことを企てたる徒にして、紀元七百十七年、東羅馬の帝位に上りしレオ三世の如きは、熱心なる「イコノクラスト」なりしを以て、勅令を發して、偶像禮拜を禁じたり、然るに此勅令に不服なるもの多く、各地に兩派の紛爭を現じ、殊に羅馬法王は、いたく之に反對を唱へ、是より斷然東羅馬との關係を絶ち、希臘教、羅馬教、全く相分離するに至れり。

爾來羅馬法王は、布教に盡力することゝ至らざるなく、次第に耶蘇教國の範圍を擴め、此等の諸國を制して宗教上のみならず、終に政治上に莫大なる勢力を振ひたり。蓋し中世に於て、社會は闇夜の有樣を呈しける際、

學問知識の光明は、獨り僧侶の中に存在せり、是を以て僧侶は、宗教以外數多の職務に用ひられ、或は一國宰相の位地に具はるものあり、或は立法裁判の事を掌るものあり、或は外國使節の任を受くるものあり、歐洲各國に於ける僧侶の勢力、決して鮮少ならざりき。羅馬法王の俗世界に關係を生ずるも、亦宜ならずや。

且や羅馬法王は二箇の偏強なる手段を掌中に握れり。「エキスコンミユニケーション」(非人親令)及び「インターヂクト」(停止令)是なり。「エキスコンミユニケーション」とは、既に概略説明せし如く、人を宗教以外に放逐する所の處罰にして、此命令を受けたるものは、苟も法王の赦免に遇はざる以上、社會より擯斥せらるゝおと甚しく、其臣僕も以て主人となさず其朋友も棄てゝ交らず、其親戚も賤みて顧みず、天地暗澹として四邊皆我が仇なり。「インターヂクト」は、前者の如く、一人のみに附着する處罰に

非ずして、多數人に及ぼすものなり。王公罪惡あるときは、法王は場合の必要を見て、此命令を發し、其領内全般に於て、宗教上一切の行事を停止せしむ。この間、寺鐘は聲なく、寺門は閉鎖せられ、死亡者あるも葬式を擧ぐること能はず、結婚者あるも賀儀を全うすること能はず、愁雲到る處に滿ち、人民の苦惱名狀に勝へざるなり。以上二箇の手段は、羅馬法王が金城鉄壁と恃みて、歐洲諸國の王公を足下に慴服せしめ、雷霆の威を發揚したる所以のものと知らる。

さて是よりは、法王權發達の順序を述べん。顧ふに彼のペピンが、「フランク」王位を奪はんとせしや、豫め法王に可否を問ひ其同意を得て乃ち「メロビンヂヤン」家、最後の王なるチルデリックを廢したり。是れ畢竟ペピンが、宗教の勢力を假りて、民心を壓服せしめ、以て其大望を遂したるものにして、羅馬法王の政治上に容喙するの先例亦實に此に開かれたり。

當時「ロンバルド」人漸く伊太利内の東羅馬領を蠶食し、其勢盛にして法王之が爲に苦しみたりしかば、ペピンは報恩の擧を企て、伊太利に入り、「ロンバルド」人を攻破し、ヲベンナ州を取りて法王に與へたり。是に於てか法王は又俗界の一君主となれり。而してシャーレマン帝の死後、紛亂相繼ぎしかば、法王は其虚に乘じて、漸く權力を伸張し、諸國の政治上に種々の干渉を試むるに至れり。然るにオット大帝の時、法王の權力一頓挫を來し、爾來廢立の事すら、尚ほ日耳曼帝に左右せらるゝ程なりしが、(オットは法王ヨハン十二世を廢して、レオ八世を立てたり。フランコニヤ系統のヘンリー三世は、三人の日耳曼僧正を法王の位に續立せしめたり。)有名なるヒルデブランド、法王となるに及び、偉大なる反動力を起して、革新の計畫に着手したり。

ヒルデブランドは、タスカニーの一小邑なるソーノに生れ、一匠人の子

なり。其素性はかく卑賤なりしかど、才力拔群なるを以て、遂に法敎參事員(「カーデナル」)とて、位法王に次ぐ)に列し、先づ法王撰擧の方法に一變を加へたり。即ち法王の撰擧權を有する人々を法敎參事員のみに限り。是迄の如く、羅馬の僧侶人民をして關係せしめず、また日耳曼帝の干涉を許さゞることとなしたり。ヒルデブランドは、紀元千七十三年法王の位に上る、グレゴリー七世とは是なり。グレゴリー畢生の目的は、法王をして、宗敎上並に政治上の首長たらしめんとするに在り。從來僧侶等、舊時の敎規を忘れ女人と同棲するもの多かりき。グレゴリー思へらく、是れ大に敎會の神聖を傷け、且勤行の熱心に妨害を加ふる者なりとて、僧侶の妻帶を禁止したり。又從來日耳曼、英吉利其他歐洲諸國に於て、王公より、僧官を授くるの習、一般に行はれしが、グレゴリーは、是れ俗界の王公をして、宗敎界を飜弄せしむる者と爲し、僧官任授(インベスチ、ユーア)

の權は、一切法王に屬すべしと布告したり。此布告の出でしは、千七十五年に在り。日耳曼帝ヘンリー四世大に怒り、國內の僧侶を會して、グレゴリーを廢せんことを議せしかば、グレゴリーはヘンリーに向つて、非人觀命を發したり。此爭の結果は前に說けるが如く、法王の全勝となれり。然るに其後ヘンリー復讎の軍を起し、グレゴリーは敗れて、サラーノ(チーブルスより東南に當れる一地)に逃れ、此地に命を終りたり。

グレゴリー死せりと雖も、其目的は後繼者の維持する所となり、羅馬法王の權力は、年一年と增加し、歐洲諸國其威命を奉ずるもの、次第に多くなり行き、日耳曼に於てもヘンリー五世の時(紀元千百二十二年)全く僧官任授の權を放棄したり。而して法王權の最高度に達せしは、實に、インノセント三世(紀元千百九十八年より、千二百十六年まで、法王たり)の時に在りとす。此時や羅馬法王は、恰かも斯世に在りて王中の王たるが如

く、暴慢比なき英王ヨハンも、法王の足下に低頭して、年々貢賦を納れ、永く渝ふざるべきを誓約するに至れり。

有名なる「アルビゼンス」征伐の軍を起せしは、インノセント三世なり。「アルビゼンス」とは、佛蘭西の南部「ツールース」侯の領内(ラングドック州)に起れる一派の宗徒にして、羅馬教に反對の意見を抱ける者なり。「アルビゼンス」といへる一部に於て、此宗徒殊に甚だ多く存せしより、「アルビゼンス」の名は生じたるなり。元來ラングドックは、氣候中和地味肥沃にして、各種の天産物に富み、且其地、々中海に瀕し、交通の便至大なるを以て、東西各地との通商夙に開け、從つて人民新知識を得ること多く、文化の程度他地方の比に非ず、羅馬教會の弊害を看破して、革新の思想を抱くに至れるも、亦宜なり。「アルビゼンス」宗徒の主義は、實に近世紀日耳曼及び瑞西に於ける、宗教改革者の意見と大同小異なりき。インノセントは此宗徒

を目して、異端邪説を唱ふるものとなし、佛國に命を傳へ、ツールース伯レーモンド六世並に「アルビゼンス」宗徒に向つて、征伐の軍を起さしめたり。之を率ゐるものは、始にシモン、デ、モントフォートあり、後に佛王ルイ八世あり。戰端千二百九年に發し、爾後二十年間、流血の慘、兵燹の禍、ラングドック地方に絶えず、終に「アルビゼンス」宗徒、殆ど了遺を留めざるに至りきといふ。

第七章　十字軍

紀元第十一世紀の終より、第十三世紀に亘り、二百年の間、歐洲諸國は、十字戰爭といへる數回の遠征に從事したり。十字戰爭の目的たる、亞細亞西部の一地、パレスタインを異教徒の手より回復せんとするに在り。元來、パレスタインは、救世主垂跡の靈地として、歐洲諸國の耶蘇教徒は、此

地に旅行を企て、以て其敬神の意を致すもの常に多し、此等の人を稱して「ピルグリム」即ち香客といふ。殊に紀元一千年の頃には、世界滅絶に歸せんとすとの說、到る處に傳播したりしかば、人々皆恐怖の念を抱き、何れも來世の冥福を祈らんとて、パレスタインに巡詣するもの幾萬千なるを知らざる程なりき。かゝ耶蘇敎徒に取りて、神聖無比なる靈地も、東羅馬の國力振はざるより以來、異敎徒の所有に歸したり。しかのみならず、終には幾多の香客、異敎徒の爲に、苛遇虐待の不幸を蒙むるに至れり。是れ豈、歐洲耶蘇敎徒のよく晏然として、坐視するに忍ぶ所ならんや。蓋し當時歐洲諸國は、義俠尙武の氣風、到る處旺盛にして、猛將勇士常に手に唾して、其力を展べ其技を顯すべき機會を待てり、此義俠尙武の氣風は、宗敎的感情と相合して、さてこそ萬壘の波浪を起し、雷奔鯨怒して、直に亞細亞の西岸に洶湧せしめたるなれ、茲にこの大活劇の顚末を述ぶ

るに方り、先づ其頃に於ける東羅馬の國狀、及び回敎徒の運動に就て、梗概を知るの必要あるを信ず。

第九世紀の終頃、東羅馬は、「マセドニヤン」系統(この系統の始は、「マセドニヤ」人バシリヤスなるを以て、又「バシリヤン」系統ともいふ。)の諸帝により、勢力を回復し、「サラセン」人よりアンチオック其他の要地を奪ひ、大に亞細亞西部を從へたり。然るに其後、「セルジユキヤン」土耳古人、漸く鴟張の威を振ひ、其首長なるアルプ、アルスランは、千七十一年に東羅馬の兵力を挫き、小亞細亞の過半を取り、乃ちイコニヤムの王國を建立せり。未だ幾ばくならずして、アンチオックも亦土耳古人の有に歸したり。シリヤ、パレスタインは、「サラセン」人之を支配し、溫和寬大の政を施しゝが、土耳古人又之を侵略し、爾來歐洲よりゼルサレムに至るの香客を苦しむること甚しく、殘暴實に堪へ難き程なりしかば、耶蘇敎國の人々をして、爲

に切齒措く能はざらしゐたり。

さて歐洲、宗教的感情、及び義俠的氣風の、點々閃爍せる星火を煽動して、忽ち照天千里の光炎を發せしめたる人を、佛國アミエンの一僧、ピータ|隱者となす。此人は身材矮小にして、容貌甚だ揚ふすと雖も、眼光烱々として人を射、且言辭激切、聽く者をして興起せしむるに足る。曾て香客となりて、ゼルサレムに赴き、親しく土耳古人の惡むべき所行を目擊して憤懣の情禁ずる能はず、異教者の手より、靈地を救ひ出さんと心に誓ひて、歐洲に歸れり。

羅馬法王アルバン二世、熱心に靈地回復の擧を贊成したり。是に於てかピータ|は、伊太利及び佛蘭西を遍歷し到る處神聖なる目的に向つて、出軍を爲さんとを勸誘したり。其時ピータ|の狀は、裸頭跣足にして、清癯の身に龜服を纏ひ、驢馬に跨り、巨大なる十字架を肩にし、大道廣區必

ず演說を試み、幾多の香客が、土耳古人の爲に虐遇せらるゝの實況を述ぶる時の如きは、常に萬人をして哀憐に堪へず、熱涙、双眼に浮び、怒氣滿面に溢れしめたりき。

かくて千九十五年、法王アルバン二世は、佛國の南部なるクラ|モントに大會を催したり。貴族僧侶武人の來集するもの、幾千なるを知らず。法王乃ち靈地回復に關する一場の演說を爲し、衆皆感憤激昂、狂するが如く、法王の勸告により、直に右肩に赤十字の布片を付け、神聖なる役に從事せんとの意を表したり。十字軍の名、此に起る。其際出兵の時期は、翌年八月十五日と定められき。

第一回十字軍　(紀元千九十六年|千九十九年)

既にして十字軍に從事せんとするもの、漸く四方に多し。但し此等の人人は、悉く皆純潔なる思想を有し、宗教の爲に生命を犧牲に供して、顧み

ざる者には非ざるなり。常に東洋は、金銀財寶山の如しと傳へ聞き、彼地に至りて、一舉に大利を網せんと欲する武人もあり。遠征によりて、地主の壓抑を脱せんと望む農夫、寺院の嚴規を免れんとする僧侶もあり、又軍に從ひて、無賴の擧動を恣にせんと思ふ惡漢匪徒もあり。此等賤劣なる感情に驅られたる者共は、心靜に豫定の期日を待つこと能はず。紀元千九十六年の春初に於て、老若男女の一隊、其數無慮二十五萬人許り、ピーター隱者並に佛國の騎士ウォルター無錢を大將として、早や既に東行の途に就きたり。然るにこの軍は、元來烏合の衆にて、規律なく、順序なく、妄に人民を殘殺し、貨財を奪掠すること甚しかりしかば、爲に沿道諸國の怒を招き、殊に匈牙利人及びブルガリヤ人の襲擊によりて、全軍大半を失ひ、而して少許の殘兵、辛うじて、ボスホラス海峽を渡りて小亞細亞に至るや、忽ち土耳古人の爲に齏粉とせられたり。

さて眞誠の十字軍は、相當なる準備を終り、整々として出陣せり。軍中第一位の將帥を德望あり智勇の聞え高き、下ロルレイン公ゴッドフレー、とす。其他の將帥には、ノルマンデー公ロバート、ベルマンドア伯ユーゾ、ルース伯レイモンド、アビユリヤ公ボヘモンド等あり。されば第一回十字軍は、重に佛國人の運動ともいふべかりき。全軍六十萬之を六隊に分ち、各道を異にして、コンスタンチノープルに向ひ、千九十七年の春に於て、終に小亞細亞に進み入りぬ、而して此大軍の精華と稱すべきは、騎士にして、其數十萬人以上に及び、皆堅甲を被り、利兵を操り、戰袍は燦然として目を眩し、章旗は翩々として風に飜り、實に無比の壯觀を呈せりといふ。

大軍奮前して、先づニゲヤを攻擊し、之を圍むこと七週日にして、城終に陷ぬりぬ。次いでドリヤムの激戰あり、土耳古人大敗す。西兵進んでシリ

ヤの大都アンチオックを圍攻すること七箇月、又之を拔く。然れども此間長途の旅行、西兵疲憊すること甚しく、加ふるに土耳古人の計畧にて、沿道の人家を燒き拂ひ、田野を荒廢に付せしかば、糧食の缺乏を感じ、飢渴の爲に斃るゝもの亦夥しく、且や戰爭時に西兵に不利なることあり、辛苦艱難の結果、六十萬の十字軍、出陣の當初より、二年許を經過したる今は、僅に二萬有餘を餘せるのみとなりぬ。かゝりしかども、此等の人々は、毫も屈するの色なく、勇を鼓して、ゼルサレムに向ひ、千九十九年の六月に至り、始めて神聖なる都府の眼前に横はるを見しや、一同歡聲を發し、皆躊躇して隨喜の涙を流し、天を仰いて上帝の冥助を感謝せり。

此時ゼルサレムは、埃及の「サラセン」人之を領したり。圍攻四十日に亘り、西兵終に「サラセン」人を破り、敵を屠殺すること、幾萬なるを知らず。ゼルサレムは、紀元六百三十六年回教徒の有に歸せしより、四百六十三年を經て、再び耶蘇教徒の手に回復せられ、十字軍の大目的斯に成就したり。西人乃ちゼルサレム王國を建て、ゴッドフレーを推選して、其王となし、かゝる、ゴッドフレーは、辭して王號を受けず、單に聖墓の保護者と稱したり。ゴッドフレー死して、其弟バルドウィン之に代り、是より子孫相承け、約そ一百年間、新王國の繼續を見たり。

ゼルサレム新王國の建立に關聯して、有名なる二種の武人あり。一を「ナイト、ホスピタラル」(又は「セント、ヨハン」の「ナイト」ともいふ)と稱し、他を「ナイト、テンプラル」と稱す。前者の名は、其武人の「セントヨハン」病院(原語「ホスピタル」)に附隨せるより起り、後者の名は其武人のゼルサレム神殿(原語「テンプル」)に近く住居せるより起る。此等の武人は、皆固く宗教の戒を持し、獨居貧苦に安んじ、神を敬し、人を守り、主としてゼルサレムに寥詣する香客の保護を務むるものなり。右の外「チユートニック、ナイト」とい

ふ武人の一社(日耳曼人之を組織す)紀元千百九十年パレスタインに生じたり、其規律前二者に異ならず、目的も亦同樣なりき。

第二回十字軍 (紀元千百四十七年ー千百四十九年)

第一回十字軍の後、五十年許を經て、土耳古人の勢力、漸くゼルサレム王國に迫りぬ、此時佛國の聖僧、セントベルナード雄壯なる辯舌を鼓して、第二回の遠征を主張し、終に日耳曼帝コンラッド三世、及び佛蘭西王ルイ七世をして、三十萬の兵を率ゐ、亞細亞に向はしめたり。日耳曼の兵先づ進んで、ボスホラス海峽を渡りしが、東羅馬帝のコンラッドに對して惡意を有し、種々の妨害を加へしより、爲にコンラッドは小亞細亞に於て、大敗に遇ひ、其軍十中八九までを失へり。ルイ次で至り、日耳曼の殘兵之に合して、ゼルサレムに進行せしかども、途中數々土耳古人の襲擊を受け、毎戰利あらず。要するに、第二回十字軍は、實に不名譽なる結果に終

ぎざりき。

第三回十字軍 (紀元千百八十九年ー千百九十二年)

紀元千百八十七年、埃及の王サラヂン、パレスタインを襲ひ、ゼルサレム王國を顚覆したり。是に於てか英王リチャード一世、佛王フイリップ二世及び日耳曼帝フレデリック一世、共に第三回十字軍を起し、フレデリックは、陸路より進み、英王及び佛王は、海路より征せり。然るに日耳曼帝小亞細亞を通行せし際、シリシヤ山間の河流にて溺死し、全軍混亂に陥ゐりぬ。英王及び佛王はパレスタインのエークルに上陸し、之を拔きしが、幾ばくもなく、佛王は英王と隙を生じ、半途にして國に歸れり。リチャード勇武なりと雖も、獨力にして久しく異域に止まること能はず、終に敵王サラヂンと休戰の約を結びたり。されば第三回十字軍も、亦其成功を見ざりき。

爾來東方遠征の擧數回ありしかど、何れも皆肝要なる結果を收むること能はず。而して千二百七十年、佛王セントルイが、第八回の役に從事せしを最終のものとし、是より其後、十字軍復た起らず。同時に亞細亞西部に於ける諸の小耶蘇教國は、次第に回教徒の爲に侵畧せられて、全く其跡を留めざるに至りぬ。

茲に十字軍の火勢消滅に至りし所以を思ふに、蓋し(第一)東方遠征の擧は、既に新奇といふ性質を失ひたり。(第二)從軍の困難莫大にして、人々の意氣を沮喪せしめたり。(第三)非常の盡力と巨多の費用とを要したる事業の結果、大抵失敗に歸したり。(第四)衆人の思想一變し、社會の改良は、異教徒攻擊の運動より、寧に急務なることを覺知したり。かくして一時歐洲諸國の人心を騷がしたる其波浪も、終に靜定に就きしなり。

十字軍の結果

十字軍は、不測の苦難を諸國に蒙むらしめ、且無數の人命を犧牲に供したりと雖も、孰つて熟察するときは、利益なる結果を歐洲に生したることも、亦決して鮮からずとす。

第一、思ふに東方に於ける征服地、殊に聖墓の如き、終に盡く歐洲人の手中より脫したり。然れども土耳古人の勢力、十字軍の爲にいたく抑制を受け、爾後歐洲諸王國の漸く發達し、十分鞏固確定の地位を得るに至るまで、敢て襲擊の擧を企て、歐洲諸國の運命に危害を加ふる等の事なかりき。

第二、貴族の此役に斃れて、其後を絕ちしもの、或は從軍の際其所有地を他に賣りしものなど數多ありて、斯に大諸侯兼併の狀を現し、社會分裂の傾向漸く減じ、歐洲の封建制度遂に激しき打擊を受け、政治上一致結合の大勢成就するに至れり。

第三、歐洲諸國の人民、同じ戰場に危險患難を共にしたるを以て、相互友愛の情、自然其間に生ずるありて、彼我敵視の感念漸く薄らぎたり。又封建君臣も、異境に苦樂を分ちたるに因り、社會上下の悪隔(へだて)、以前に比して減少の傾向を呈するに至れり。

第四、歐洲人は、十字軍によりて未知の境に赴き、未見の民に接し、大に地理上の知識を擴張したり。且や當時歐洲人は、「サラセン」人の眼よりすれば、未開野蠻の域を免れざりしが、一たび十字軍に從事し、東洋の燦然たる文物制度を覩て、心中發明する所鮮からず、上下一般の思想、斯に大なる變化を生じたり。

第五、歐洲人は、東洋に至りて、天然人爲の珍産奇物(めづらしきもの)を目擊し、社會從つて新需要を生じ、通商貿易の業、之が爲に大なる奬勵を受けたり。伊太利諸共和國の勃興せしは、其原因職として此に存す。

第六、商工の都府、漸く繁榮富强の有樣を呈し、遂に所謂中等社會上級は貴族僧侶にして下級は耕夫勞働者なり)を出し來り、是より種々肝要なる社會上の變化を惹起したり。

第八章　騎士制度

歐洲封建の時代に於て、騎士制度の存在を見る。この制度は、中古亂雜の社會に在りて、道德の命脉を扶持保維するに、甚だ力ありしものと謂ふべし。而して其武道の組織に、宗教の分子を加へ、神聖高尚なる體裁を取り、制度最も完備に達せしは、十字軍以後の事なりき。

さて日耳曼種族は、元來尚武の氣象に富み、又婦人を尊重するの風ありき。騎士制度は、實に根抵を此に取りしなり。

騎士(「ナイト」)とは、一箇の名譽ある武爵にして、苟も其人に非ざれば、得て

其稱號を望むべからず。凡そ騎士たるものは、主として勇武の資を有せざるべからざるは、勿論忠信にして君上に奉仕し、居常溫良恭讓を旨とし、慈仁寛大を專とせざるべからず、殊に婦人を敬し其利益を計り、其患害を救ふの責任を負ひ、又宗教を保護し、之が爲に一命を犧牲にして顧みざるの決心を持するを要す。以上の資格と精神とを有するものは、則ち騎士たることを得るなり。かくして騎士は、社會到る處に優遇を受け、種々の特典を荷へり。從つて騎士は、何れも名譽を惜み、節義を守り、澆季(ぎょうき)(よのすえ)混濁の社會に在りて、中流の砥柱と一般なる觀を呈し、世道人心を將に頽(すた)れんとするに支へ、衆庶具瞻(しゅうしょぐせん)の師表(しひょう)となれり。蓋し歐洲騎士の風は、多少我國封建時代武人の志操に似たるものありとす。

士人の子弟、齡七歳に至るときは、父母の膝下を離れ、君侯の城中に入りて、「ページ」(扈從)(こじゅう)となり、禮儀作法等より始めて、騎馬戰鬪の法を敎へられ、

常に高貴なる婦人、又は勇武なる騎士の間に、周旋奔走の勞を執り、知らず識らず、種々心術の練磨を受く。既にして齡十四歳に至れば、「スクワイヤ」(從士)となり、常に騎士に附隨し、騎士戰場に赴くときは、其馬を牽ぬ、軍中決して其側を離れず、主若し危難に瀕する場合には、全力を奮つて之に援助を與ふるを務とす。齡二十一歳に及びて、其人適當と認めらるゝときは、則ち騎士の爵を受くることを得るなり。

騎士たらんとするものは、嚴肅なる一定の儀式を經ざるべからず。即ち其人は、儀式執行の期日前、數夜引續き、寺院に於て祈禱を爲し、僧侶に一切の罪を懺悔したる後、沐浴して白衣を着し、以て身の純潔を表し、已に騎士の爵を授けんとする人(即ち騎士なり)の前に至り、種々の審問を受く。審問既に終りて其人は、宗教の爲に力を盡すべし、君主に忠節を勵むべし、婦人の名譽と身体とを保護すべし、又弱を扶け暴を挫くべし等の

宣誓を爲し、是に於てか、騎士たるの證として、金色燦然たる刺馬輪と飾帶とを付與せらる。右の後、君侯の前に跪坐し、君侯よりその右肩に、劍の平面にて輕打を受け、儀式乃ち終結を告ぐ。

騎士制度の時代に於ては、較武戲といふ事、盛に行はれたり。戲場は、卵形の地に柵を繞らし、四方に看棚を設け、王侯貴女等、皆華麗を極めて來觀す。場内には、騎士球槍を以て武技を較し、對手を馬上より突き落すを目的とす。較武戲は、戰勝、即位、又は王侯結婚等の場合に起る。勝者は、場の主人公なる貴女より、賞典を受くるを例とす。此戲は佛蘭西に嚆矢を發し、其國に於て最も完全の域に達したり。

前にも述へたる如く、騎士制度は、中古の時代に於て、種々の美風を維持し、社會に利益なる結果を生したりと雖も、其弊害も亦鮮からざりき。即ち物換り星移るに從ひ、此制度の精神次第に懷れ、かの尙武の氣象は、思

想單純なる騎士をして、産業を賤しみ、秩序法律を無視せしむるに至れり。又かの名譽心は、淺慮なる武人を驅りて、涓埃の瑣事にも激怒を發し、忽ち劍戟に訴へしむるに至れり。而して其極、騎士は遂に社會の蠹害となり、暴力を奮ひ、爭鬪を事とし、甚しきは隊を結びて、盜賊の所行を爲すに及び、昔時の名聲は全く地に墜ち、かくして火藥の發明によりて、無用の長物となり、封建制度の破壞と其運命を共にするに至りぬ。蓋し樊噲(ハンクハイ)張飛(二人共昔支那の勇將)の勇も、火藥の使用に對しては、復た毫末の功を奏すること能はざるなり。

第九章　中世文明の變遷

第一、闇世

闇世とは、紀元第五世紀の終より、第十一世の終に至るまで、六百年間を

いふものなり。此時代に於て、歐洲諸國は、學問の光明殆ど滅絶に歸せんとするの狀況を呈し、人智非常に低度に赴き、社會は到る處亂雜不規則を極め、農工等の業、至つて萎靡不振の姿なりき。

顧ふに西羅馬帝國の末造に方り、世運衰微し、人心壞敗に向ひしが、「チユートン」種族のゴール、伊太利、西班牙を占領するに及び、彼等固より强暴不文の蠻民なるにより、戰鬪奪掠の外、何事をも知らず、文學の如きは、只管輕視して、齒牙にも掛けざりき。風潮の及ぶ所、復た如何とも爲す能はず、元來の住民も、亦之に感化せられたり。且やゴール、伊太利、西班牙の人民、是より先拉丁語を使用したりしが、「チユートン」種族の入り來りしより以來、「チユートン」語と拉丁語と相混同して、一種のもの、所謂「ローマンス」語起り、普通人民の間に使用せらるゝに至りしことは、既に第一章に說きたる如し。然るに世に存在せる書籍は、一切拉丁語なれば、人民之を

讀解し得るものなく、日常の言語にて記載せる書籍とては一も之なく、從つて讀書執筆を能くし、多少の知識學問を有せるものは、殆ど寺院僧庵の內に限り、一般人民は、全く文字を知らざる有樣となりぬ。佛國は第八世紀の始、英國は第九世紀の中頃、最も蒙昧不文の極點に達し、伊太利は第十世紀間、學問の程度甚だ低下の塲合に至れりといふ。佛國は、シャルレマン帝以後、徐々に進步の色を呈し、英國はアルフレッド大王の力にて、學問復興に赴けり。アルフレッド曾て言へることあり曰く、余即位の際、テームス河以南(國中最も開けたる部分)に於て、尋常の祈禱文を了解し、又は拉丁語を英語(當時の英語)に飜譯し得る所の僧侶とては、一人も見ることを能はざりきと。以て當時英國の無學文盲、甚しきを想知するに足らん。

之かのみならず當時書籍の缺乏は、此一般の無智不文を起したる大原因

なりと知らる。蓋し、サラセン人第七世紀の始に於て、アレキサンドリヤを征服せしより以來、かの有名なる埃及紙草(パピラス)の歐洲に輸入せらるゝこと、其跡を絶つに至りぬ。而して襤褸より紙を製造するの法、世に知られしは、第十世紀の終なり。されば其間文字を記載するの材料としては、羊皮紙の外なかりき。然るに羊皮紙は、價甚だ貴きが爲に、前記の文字を削り去りて、同じ紙を再三再四の使用に充つる等の事ありきされば世上書籍の寥々たるは勿論にして、又文字削去の爲に、名人大家の遺跡を後に留めざるもの多かりしは、いと惜むべき限なり。

但し此闇世に於て、學問上二三の英物現はれたり。即ち第七世紀より第八世紀に亘りては、英國宗教史を編せし英人ビートあり。第八世紀には、かのシャーレマン帝を助けて、學事の廣布に力を盡しゝ英人アルキンあり。又第九世紀の中頃、雷名を轟かしゝ愛爾蘭人ジョンスコタスは、希

臘語、拉丁語に通達し、プラトーの哲學を窮めたり。第十世紀の終より第十一世紀の始に亘り、羅馬法王たりしシルベスター二世は、思想精緻にして、數學に深きを以て著はれたり。然れども、かゝる人物は、闇世の間實に曉天の星の如く、社會一般は蒙昧の黑雲を以て蔽はれ、蠢々たるのみ。

されば此際人智の程度非常に低くして、到る處迷信深く、妄說怪說の横行甚しかりき。今一二の例を擧げて、之を證せん。當時誰れ言ふとなく、紀元一千年は、世界滅絶の期なりとの說、世間に廣がり、折しも疫病起り、饑饉又之に續きしかば、無智の人民、狼狽顚倒家を去り、業を離れ、皆寺院に雲集し、祈念に日を送り、神助を求めたりき。其頃日耳曼帝オット一世出軍の擧ありしに、途中に於て恰かも日蝕に遇ひ、兵士等之を見て即ち世界滅絶の兆なりとし、何れも先を爭ふて四方に潰散したりといふ。又闇

世には、神裁といふ事行はれたり。此は人の善惡判明せざるとき、原被兩造をして、決鬪を爲さしめ、又は、熱湯を探り、熱鐵を握らしむるものなり。神は見ざる所なく、知らざる所なく、無罪を保護し、有罪を罰極するにより、善人は必ず決鬪に勝利を得べく、又熱湯を探り、熱鐵を握るも、決して傷害なかるべしとて、さてこそ神裁といふ事の起りたるなれ。人智の有樣此の如くなれば、當時歐洲諸國には欺騙者多く出で、自ら稱して神言者といひ、詐術を逞しうして、人民を惑はすこと甚しく、人民の之を信仰し、尊崇するものも亦夥しかりき。

闇世の社會は、法律なく、秩序なく、百般の生業幼稚の極なりき。當時王侯貴人は、皆狩獵に耽り、禽獸の數減少せんとを恐れて、森林を伐採し、又は沼澤を排水して、田園と爲すを許さず。農業の進歩せざるは、固より當然にして、歐洲の沃野肥地も、荒蕪に就き、一毫の收穫を生せざりしこと、數

百年に亘れり。且や封建君主、何れも貪慾を逞うし、旅客商人にして、領內の橋梁、又は道路を通行するものには、過大の通行料を課したり。獨り此に止まらず、殘暴驕恣なる諸侯に至りては、公然兵士を引率して、其城砦より出で、用捨なく旅客の金銀財寶を掠奪したり。諸侯既に此の如く、社會到る處亂雜を極めたれば、白晝盜賊跋扈して、毫も憚かる所なかりしは、復た怪むに足らざるなり。かゝる世の中に於ては、豈商工業の發達を望むべけんや。交通不便にして天地局促(せまる)、人々の見る所、大抵小區域に限られ、物品製造の如き、固より唯だ近隣の需要を充すに止まるのみ。第九世紀の頃には、一國の君王も、尙ほ衣服の供給を他に仰ぐこと能はずして、自家の御料地に於て、婦人をして之が製造に從事せしめたる有樣なりきといふ。

されど闇世の間、亦一點の光明なきに非ず。歐洲の人民大抵自由なく、財

産なく、又一丁字なく、極めて憫むべき境涯に沈淪し居りし際、耶蘇教會ありて、斯に拉丁語の知識を保存し、古昔學問の命脈將に世に絶えんとせしを維ぎ留め、且貧弱無告の者に救助を授け、寃抂不幸の輩に保護を加ふるの一手段となり、以て社會に利益を與へたること鮮からざりき。されば「ハラム」氏(英國の有名なる歷史家)曰く、宗教は混亂世界に於て、一の橋梁たる如き觀を呈し、實に古今文明の中間に立ちて、之が連鎖を爲したりと。

而して闔世の際、耶蘇教會の社會に與へたる利益は、「モンク」の爲す所其多きに居ると謂はざるべからず。「モンク」とは、普通の僧侶と異りて、全く俗世界より出離し、或る嚴戒を持したる一派の僧侶なり。耶蘇宗教に於て、「モンク」の嚆矢は、蓋し「ベチヂクチン」門徒とすべし。此門徒は、其服色より、又黑衣僧とも稱す。開祖は伊太利アンブリヤ洲の人なるセント、ベチヂクトにして、紀元第六世紀の初頃に方り、東洋の僧侶が、塵緣を絶ち(浮世のゆかりを斷つ)巖居川觀(山水の間に住む)以て行を勤め、道を修むるに倣ひ、チーブルス近傍なるカッシノ山中に「モンク」の寺院を建てたり、其後此門徒の數、漸く增加し、盛大に至りしが、年月を經過するに從ひ、教規次第に弛み、修道復た舊日の如くならざりしかば、其弊を矯正せんとて、他の門徒相繼で現はれき。即ち「シスターシャン」門徒は、紀元千九十八年佛國ディジョン近傍に起れり。此門徒の稱は、寺院の名(シストー)より來る。「フランシスカン」門徒は、紀元千二百十年伊太利中部に起れり。開祖は、セント、フランシスにして此門徒は、其服色より、又白衣僧と呼ばる。ボナベンチユラ、ダンス、スコタス、ローシャー、ベーコン等の學者は、此門徒に屬せり。又「ドミニカン」門徒は、紀元千二百十五年佛國南部ツールースに起れり。實に「アルビゼンス」征伐(第六章に詳なり)の際なりき。開祖は、セント、ドミニックにして、アル

バークス、マグナス及びトーマス、アクイナス等の學者は、此門徒に屬せり。(以上諸學者の事は、後文に詳述すべし。)

さて、「モング」は三戒を持せり、曰く清淨無垢なるべし。(女人を近づけざること、固より言ふを待たず。)曰く貧窶に安んじ、苟も有する所あれば、一切惠施に充つべし。曰く恭從溫順にして、長上の命敢て違ふことなかるべし。

「モング」は、常に此三戒を服膺して、世の爲め、人の爲め、力を盡して決して厭ふことなく、飢者には食を給し、病者には藥を授け、虐遇に苦しむ者には、避難の場所を與へたり。しかのみならず、「モング」は、耒耜を執りて、荒地を開墾し、農耕の方法に改良を加へ、又學校を建て、文庫を起し、教育の業に意を用ひたり。されば法律なく秩序なき闇世の社會に於て、「モング」は、實に人類幸福の一泉源なりき。

第二、世運興復の時代——都府及び商業

第十一世紀より、第十五世紀までを世運興復の時代とす。此間歐洲諸國或は迅速に、或は徐々に、蒙昧の境を脱し、貧弱の態を變じ、以て近世文明富强の基礎を作りたり。之を天の將に明けんとするに譬ふ、東方漸く白く、星光次第に微なり、既にして半空紅色を漲らし、旭日曈々雲霧を排して海嶠を離れ、萬物斯に昭然たるが如し。

世運興復の徵候として、吾人は歐洲諸國に於ける都府の隆盛に赴くを見る。顧ふに「チユートン」種族遷徙の際、古昔羅馬帝國の都府、蠻民の爲めに焚掠破壞せられたるもの鮮しとせず。その幸に厄難を免れたるものも、いたく衰微の狀に陷ぬりたり。然るに其後に至り、世運の漸く興復に向ふや、歐洲各地に新都府の起るあり、同時に舊都府も、幾分か前時の面目を呈するに至れり。時進み、商工業發達するに從ひ、都府の勢力益々侮り難き有樣を現し、殊に十字軍以後は、大に富强の度を增加したり。かく

て都府は、何れも寇を防ぎ、患を掃はんが爲に、周圍に胸壁を築き、塹濠を固めとし、遂に種々の手段を以て、封建君主より課税の免除を受け、又獨立の法權を得て、斯に共和政體を建立せるものも多かりき。而して此際都府には、種々の組合(原語「ギルド」)起りたり。但し大別して、二種となす。一は、共濟組合にして、他は商工組合なり。共濟組合とは盜賊防禦の爲め、又は疾病災厄救助の爲め、相互利益を計る所の同盟なり。商工組合とは、或る商人又は或る工人の間に設けらるゝ同盟にして、各其規約を制定し、其習慣を維持するものなり。

北部歐羅巴の商業は、太西洋、日耳曼洋、及びバルチック海に沿へる地方に於て、發達に向へり、其重なる都府を擧ぐれば、日耳曼北部に、リューベック、ハンブルグ、ブレメン、ダンチッヒ、コニスグスベルグ等あり。ライン河畔に、コローン、あり。又フランダーにはブルージ、ガン等あり。第十三世

紀に於て、此等の都府は、同盟を作り、相互の爲に患寇を防ぎ、又利益の保持伸張を務め、海陸商路の安全を計りたり。「ハンザ」同盟「ライン」同盟「スウエビヤ」同盟等、即ち是なり。而して其重なるものを「ハンザ」同盟(又「ハンシャチック」同盟ともいふ、「ハンザ」とは聯合の意なり。)とす、同盟の牛耳を執るものは、リューベック府なり。此同盟は、其最盛の時に在りてや、大小九十の都府を包有し、區域は和蘭、英倫、那威、日耳曼、露西亞等の數國に亘り、實に歐洲北部の商權は、殆ど全く其掌握に歸したり。かくして第十四世紀の頃、此同盟は歐洲の政治上に卓爾たる形勢を張り、第十六世紀に至るまで、之を維持したりき。

歐洲南部の商業は、地中海に沿へる地方に於て、發達に向へり。北部と南部とは、元來各別の商業區域を成したりしが、第十四世紀の初頃、双方の間往來交通の起るを見たり。南部の重なる都府を擧ぐれば、伊太利にフ

ロレンス、ピサ、ゼノア、ベニス、アマルフイ等あり。佛國西に。マルセイユ、ナルボーン、ニーム、モンペリエー等あり、西班牙に、バルセロナあり。以上の中に於て、伊太利の諸都府、商業最盛と稱せらる。

商業の發達は製造業の進歩に伴ふものなり。此際歐洲北部の重なる製造業を毛織物とす、フランダーに於て、此製造業殊に盛に行はれ、第十三世紀の頃、其極點に達し、或る歴史家は、當時世界の毛織物は、皆供給をフランダーに仰げりと言ひし程なりき。英國は、其初羊毛をフランダーに輸出し、以て重なる財源をなしたりしが、第十四世紀に於て、英國商業の父と稱せらるゝエドワード三世、フランダーより數多の織工を招き、毛織物の製造を開始したり。爾來英國の商業頓に昌へ、富榮の度速に加はり、以前卑賤の地位に在りし商人も、社會より優遇を受くるに至りしは、英國史上、實に此時代に始まれり。

又歐洲南部に於ては、紀元千百四十八年、ローガル、ギスカード(即ちローガル第二世なり)シヽリー島の北邊なるパレルモ府に、絹製造の業を創めたり、之と殆ど同時に、ゼノア人も、西班牙の「ムール」人によりて、絹製造の術を知得したりといふ。而して第十二世紀に至りては、此製造業大に伊太利北部に行はれ、ロンバルデー及びタスカニー地方の諸都、皆法律を設けて、桑樹の培植を進めたり。

航海通商の盛なるに從ひ、各國相互に其船舶の利益を保護する法律、斯に缺くべからず。昔時ローズ(小亞細亞近海の一島)人、一の海上法を制じ、羅馬諸帝之を採用したり。第十三世紀の中頃に於て、昔時の法を參酌し、之を補張し、一層綿密完全なる海上法現はれき。之を制定發布したるは、西班牙のバルセロナ人ともいひ、又伊太利のピサ人、或はベニス人ともいへり。此法は今日歐洲商法の基礎をなすのみならず、尚其内には、中立

國及び交戰國の船舶に關し、相互權利の規定を爲したるを以て、實に國際法の萌芽を發せるものと謂ふべし。但し此法は、地中海上に勢力を有し、歐洲北部に於ては、又特別の海上法存在したり。

金錢上に關する經營は、商業の肝要なる部分にして、又商業の發達を助くる一大機關たり。然るに中世に於て、金錢を貸し付けて、利息を收むるを一の罪惡なりとするの僻說行はれ、通常人は何れも此業務を嫌忌すると、蛇蝎の如く、從つて金貸業は、全く歐洲諸國に散在せる猶太人の掌中に歸したり。金貸業獨占の姿を呈したるにより、當時利息の割合、非常に高きは、固より自然の勢なり。かくて猶太人は、第十二世紀の頃、一時非常の富榮をなし。諸國に跋扈せしが、其人民元來無耻不信にして、苟も利の在る所は、德義を顧みず、人情を思はず、只管殘忍の振舞をなすもの多かりしかば、未だ幾ばくならずして、到る處歐洲人民の憎惡を受け、國王

の中には、或は命を發して猶太人に對する負債者の義務を免除せしものもあり、或は一時猶太人を國外に斥け、其財產を沒收せしものさへあり。其極英吉利にては、エドワード一世(第十三世紀の終)の時、猶太人全く放逐に遇ひ、クロムウエル(第十七世紀に於ける英國有名の軍人、又政治家なり)の時まで、法律上英國に住居することを許されざりき。又佛蘭西にては、チャールス六世(第十四世紀の終)の時猶太人全く放逐に遇ひ、爾來法律上佛國に住居することを許されざるに至れり。去かのみならず、第十三世紀の初頃より、猶太人獨占の業務、大に他の手中に歸するを見たり。即ちロムバルデー、及び佛國南部の商人等、爲換手形を以て送金の用を辨じ、及び利息を取りて金錢を貸し付くるの業務に從事したりき。かくしてロンバルデーの貸金業者、歐洲各國に住居を取り、殊に英國にては、有名なるロンバルド街(銀行の所在地)を生じたり。

上述の如く、世運漸く進歩し、商工業次第に發達するに從ひ、人民生活の狀態、變化を現すに至るは、自然の傾向なりとす。伊太利は、元來英國、佛國、日耳曼等に比して、風俗優美なりと稱せらる。然るに第十三世紀に於ては如何、或る史家は曰く、當時伊太利人生活の狀態、粗野なるを免れず。夫妻食するに、皿を共にし、酒盃一二箇以上を有する家とては、殆ど之を見ること能はず、蠟燭等いまだ存せざるを以て、晩餐の間は僕婢火把を持して之を照す、衣服は概ね裏を付けざる革を用ふ、普通の人民、肉食は一週三回に過ぎず云々と。伊太利既に然り、他の諸國は以て類推すべし。然るに第十四世紀に於ては、諸國の風俗、頓に華奢に赴き、衣服に金銀を飾り、飲食に八珍を列ね、器什善美を競ひ、家屋輪奐を爭ひ、滔々社會皆是なりといふべき有樣を現じたり。されば其頃僧侶の輩は、いたく侈靡贅澤の習に向つて、非難の聲を發し、又衣服飲食等に關し、費用制限律といふ

もの、發布をさへ見るに至りき。

第三、宗教及び學術

○羅馬法王の、政治上及び宗教上に、廣大なる權力を振ふに至りしことは、第六章に於て之を說きたり。而して第十一世紀より第十三世紀に亘り、其權力最も盛なりしことは、諸君の既に知了せらるゝ所ならん。實に中世闇昧の社會に於て、知識學問を有せるものは、殆ど僧侶に限りしを以て、僧侶は或は一國宰相の任に當り、或は立法裁判の務に從ふ等、俗世界の事に關係すること鮮からず。加ふるに國王より采地を受け、儼然封建君主の體裁を爲すものも多かりき。日耳曼に於て、メンツ、コローン、トレーブの三大僧正は、實にかの七選擧侯(日耳曼帝選擧の權を有する諸侯)の中なりき。かゝる僧侶の上に立ちて、命令を行ひし羅馬法王の權力、廣大なりしこと、亦以て想知すべきなり。

然るにこの隆々たる法王權に、打擊を加ふべき種子ある生じたれ。即ち紀元第十二世紀の頃より、羅馬教會の教理儀式に反對を試むる徒、漸く諸國に多く、彼に滅すれば、此に起り、隨て抑ふれば、隨て揚り、かくして自由思想(羅馬法王の命令訓示に默從せず、偏に聖經を標準として、宗教上の事を判斷すること)の精神、次第に旺盛に赴き、終に近世宗教改革の楷梯を爲したり。

是より先、亞細亞のアルメニヤ地方に、ポーリシャン宗徒と呼べるものありき。此宗徒は、聖經に就て一種の見解を立て、其他羅馬教會と氷炭相容れざる種々の思想を有したりしが、其宗徒の一部分、嘗て歐洲のブルガリヤに移住せしことありて、是より其見解思想、漸く歐洲西部に波及するに至りぬ。既にして匈牙利、バワリヤ、ロンバルデー、瑞西及び佛蘭西等の諸國に於て、羅馬教會の教理儀式を排斥するもの次第に多く、種々

の宗徒斯に起りしが、就中最も有名なるものを、「アルビゼンス」及び「ワルデンス」とす。「アルビゼンス」の事は、第六章に詳なり。「ワルデンス」宗徒は、佛國リオンの人、ピーター、ワルドーといふもの、之を立つ、時は紀元千百六十年なりき。但し此等の宗旨を以て、ポーリシャン宗旨と同じきものとなすは、誤まれり。畢竟一種の風潮、亞細亞より歐洲に侵し來りて、自由思想の精神を振起せしめ、是に於てか羅馬教會に反對を試むる數多の宗徒、各處に起りしものと知るべきなり。

羅馬法王は、實に此等の宗徒に對して、鎮壓の策を務めたりと雖も、大勢の趨く所、復た如何ともすること能はざるものありき。而して英國に於て、エドワード三世(紀元千三百二十七年より千三百七十七年に至る)の時、羅馬教會の一强敵現出したり、即ちジョン、ウイクリッフ其人なり。此人は、ルーテル(第十六世紀に出づ、有名なる宗教改革者なり、)新教と殆ど

同じき主義を持し、大に法王權に抵抗を試み、又聖經を英語に譯し、一般人民に宗教上正當の觀念を與へんことを企てたり。ウイクリッフ存生の間は、衆人の歸依尊敬を受けしが、死後に至り、其墳墓發掘せられ、遺骸火刑に遇ひ、又之が信徒、即ち「ロルラード」(聖歌を唱ふるものといふ意)は、いたく虐待を蒙りたり。此ウイクリッフの意を承けて、ジョン、ハッスといふもの、ボヘミヤに起れり。第十五世紀の初、プレーグ(ボヘミヤの一都)に於て、大に羅馬教會に攻擊を加へ、宗教改革の必要を主張し、法王威力を以て之を制壓せんとしたれども、毫も顧みることなく、終に瑞西コンタンスの僧會に赴き、其持說に就て陳辨あらんと欲し、到れば則ち、忽ち禁錮に處せられたり。僧會審問の際、其所論撤回を命じたりしかど、ハッスの決心斷乎として動かず、是を以て紀元千四百十五年六月六日、燒殺に遇ひ、其骨はライン河に投入せられたり。上來陳述する所により、

社會人心動搖の機既に發し、羅馬教會の運命次第に非に向ふを見るべきなり、亦以て近世の初(第十六世紀)に於て、宗教改革といふ大事件の發生を豫知するに足らん。

○是よりは、中世學術界の景況を述べん。歐洲の文運は、第十二世紀の頃に至り、頓に進歩の徵候を現じ、羅馬法律(第二章ジャスチニヤン帝の條を參看すべし)の研究、先づ盛況に至り、伊太利のボロナ、チープルス、パシユア等に於ける諸大學、主として之が講習に從ひ、學者四方より雲集せり。かくて他の諸國に於ても、法律の研究行はるゝに及びしが、就中佛蘭西のモンペリエー、及びツールース大學は、法律を以て著はれたり。是に於てか羅馬法律の勢力は、伊太利を始として、佛蘭西、西班牙、日耳曼等諸國の法廷に逼きに至りぬ。さて又各般の學術に關しては、諸國漸く大學の崛起するを見たり。佛國巴里の大學は、第十二世紀の初に有名となり、

次で英國にては、オックスフォルド、ケンブリッヂの大學、西班牙にてはサラマンカの大學、頭角を露したり。日耳曼に於て、大學の嚆矢をプレーグ大學とす其創立は、紀元千三百五十年に在り。ライプシック大學は、千四百九年に建設せらる。而して中世の間、最も學者の注意を引きしものを煩瑣哲學(「スコーラスチック、フイロソフイー」)とす、其說く所は、形而上至高至妙の理にして、幽玄を闡き、精微を穿つ。煩瑣哲學の中心と稱すべきは、蓋し巴里大學なりき。

煩瑣哲學の論爭に於て、重なる黨派を名稱論者と實在論者とす。名稱論者は曰く、總て普關名稱(例へば美麗)に對するものは、外界に實在せず、單に名稱の上に於て存するのみと。之に反して實在論者は曰く、總て普關名稱に對するものは、各箇の物体以外に於て、別に自ら實在すと。此二派互に其所說を固持し、論爭の久しき、第十二世紀より第十四世紀に亘り、

終に名稱派の勝利に歸したり。實に哲學上かゝる論爭は、人心を練磨するに於て、効を奏すること鮮からず、以て第十六世紀第十七世紀に及び、各種有益なる研究に從事せしむるの準備を爲したるものと謂ふべきなり。

セントアンセルムは、伊太利ピードモントの人なり。ジョンロッセリンは、佛蘭西コンピエンの人なり、共に第十一世紀に出づ。煩瑣哲學は、此等の人より其端を發したりといふ。之に次いで有名なる人を佛國のアベラードとす、第十二世紀の初、巴里大學の講師たりき。セントベルナード及びピーターロンバルド等は其弟子なり。第十三世紀及び第十四世紀は、此哲學の最盛時代にして、アレキサンダー、デ、ヘールス(英人)ボナベンチユラ(伊人)ブラッドワルデイン(英人)等、卓越なる哲學者輩出せり。殊にボナベンチユラは、思想高尚にして、性行完全なりと稱せらる。されど最

も著しき學者は、トーマス、アクイナス(シヽリー鳶の人)及びダンス、スコタス(英人)なり。此兩人哲學上一新見識を立て、互に相容れず、前者の徒を「トミスト」と稱し、後者の徒を「スコチスト」と稱し、二派の間、論爭甚だ激烈なりき。ダンス、スコタスの弟子に、ウイリヤム、オッカムといふものあり、かの名稱派の勝利を制したるは、全く此人の力なりといふ。

中世に於て、理學の大家二人あり、アルバータス、マグナスといひ、ロージャー、ベーコンといふ、共に第十三世紀に出づ。前者は、日耳曼スウエビヤの人にして、數學、星學等に達し、後者は、英國ソマーセットシヤイアの人にして物理、數學、地理、星學等に邃(フカ)し。此兩人の知識思想、負に時流に超絶し、他人より見るときは、殆ど不可思議と考へらるゝ程なりしかば、當時の社會は、此兩人を目して、魔術家となし、其罪を鳴すに至れり。余雅嘗て日本歷史に於て、幕府の時代、洋學者の困難に遇へる有樣を記して曰く。

(上畧)然れども當時の狀況を考ふるに、洋籍の數も至つて少かりしなり。知識を啓發し、思想を研磨すべき師友も、至つて乏しかりしなり。且や當時上下共に頑愚固陋の空氣に取り圍まれ、泰西の新事物新知識を忌み、之を蛇蝎視したる世の中の事なれば、洋書研究者の困難は、言はん方なく、動もすれば刑辟に觸れ、社會の擯斥を蒙むるに至る。實に幕府の末造は、彼の理學の泰斗たりしロージャー、ベーコン及びアルバータス、マグナスを目して、魔術家と爲し、之を罪人の取扱にしたる歐洲中世の時代と等しくして、洋學者は講習上非常の不便を感ずるのみか、一歩を誤まれば、忽ち幽囚の身となり、死刑の慘に罹る。(下畧)

實に社會の先覺者が、凡庸の輩に疾視せられ、轗軻(カンカ)(時節に遇はざる事)不幸に沈淪するは、古今東西其例鮮からず。而して其事業に至りては、死後永く世に傳はり、社會其惠を荷ふ。後人深く前人の功勞を追想し、感謝の意を表せざ

るべからざるなり。

中世文運の進歩に關しては、亞拉比亞人の功績顯著なりとす。亞拉比亞人は、西班牙に於て、學校及び文庫を建設すること夥しく、盛に數學、星學、動植物學、化學、醫學等の研究に從事したり。又當時歐洲の學者、希臘語に通せず、希臘大家の著書の拉丁語に飜譯せられしは、全く亞拉比亞人が先づ之を亞拉比亞語に飜譯したるに由るなり。西班牙に於て、有名なる亞拉比亞の學者をアビセンナ(第十一世紀に出づ)及びアベロース(第十二世紀に出づ)とす。羅馬及びコンスタンチノープルの學者等、斯世界を以て平面なりと信じ居れる際、亞拉比亞人の小學校にては、既に球体の說を敎へたり。又天象觀測臺の歐洲に於て建設せられたるは、亞拉比亞人を以て、嚆矢となす。

而して又中世の間、歐洲諸國新言語の發達著しく、其結果として諸國固

有の文學斯に現はるゝに至りぬ。第一章に於て諸君も既に知らるゝ如く、佛蘭西南部には、「プロバンス」語あり。此地方には、第十二世紀及び第十三世紀間、數多の詩人輩出せり。此等を稱して、「トルーバドール」(創成者といふ意なり、即ち詩の創成者なり、といふ。又同時頃、佛蘭西北部に「ノルマン」語の詩人起れり。南方の詩人は、重に戀愛を種とし、北方の詩人は主として武功を歌ひき。西班牙語にては、第十二世紀の中頃、「シッド」といふ詩の出でしを見る。此は西班牙の勇將ルイ、デアズの偉績を叙したるものにして、「シッド」(即ち主公といふ意)とは、此勇將が降伏の敵人より受けたりし尊稱なり。日耳曼にても、亦第十二世紀の中頃、「ニベランゲン、リード」(即ち「バルガンヂャ」人の一派なる「ニベランゲン」族の歌)とて、自國の言語にてものせられし長篇の詩出でたり。詩中の事實は、紀元四百四十年頃に在りて、場所はライン河畔及び墺地利、匈牙利の邊境なり。此詩は、日耳

曼の「イリヤッド」(詩聖ホーマーの作、希臘史に詳なり、)と呼ばる。

伊太利に於ては、最も卓越なる詩人出でたり。デンテ即ち是なり。其名篇を神聖戯曲(ディバイン、コメディ)とす、未來の三界、地獄、淨土、及び天堂の有樣を記述したるものにして、曲たる一百、行たる凡そ一千四百あり。デンテは、千二百六十五年フロレンスに生れ、千三百二十一年ラベンナに死す。其存生の間、絶えず逆境に苦しみ、憂愁鬱結の情、溢れて終に斯千古の大作を成し、死後盛名不朽に傳はるに至れり。デンテに次で、顯著なる文學者には、ペトラルク(千三百四年に生れ千三百七十四年に死す)あり、ボッカチオ(千三百十三年に生れ千三百七十五年に死す)あり。

英吉利にては、第十四世紀にチョーサー出づ英國詩學の大家、又鼻祖たり、千三百二十八年に生れ、千三百九十九年に死す。

さて中世文明の變遷は、以上數章にて叙し終りたれば、是よりは更に各

國の沿革に立ち戻り、第四章に接續して、說述する所あらんとす、

第十章　紀元第十二世紀より中世の終に至るまで四百年間の歐洲諸國

第一　日耳曼帝國附瑞西

「ホーヘンストウヘン」系統は、紀元千百三十八年より、千二百五十四年まで、繼續したり。諸帝の中著しきものを、フレデリック一世及び二世とす。フレデリック一世、赤髯なりしを以て、「バルバロッサ」の稱を得たり。此帝は、專ら帝權を擴張し、貴族の横行を抑へ、一國の秩序平安を保維するを務めたり。然るに其後帝は、羅馬法王と確執を生じ、互に相反眼せしが、方に伊太利の諸都府、帝政に不滿を抱き、其羈絆を脫せんと欲するもの、往々之あるに會す。法王乃ち之と結托し、以て帝に抵抗を試みたりき。法王

の左袒者を稱して「ゲルフ」といひ、日耳曼帝の左袒者を稱して「ギベリン」といひしは、蓋し此時頃よりの事と知らる。是より先「ホーヘンストウヘン」系統の初代コンラッド三世の位に即きしや、「サクソン」人及び其他の種族、王命を奉せざるものありて、戰爭多年に彌れり。而してウエインスベルグ攻城の際、敵軍其首領の名を呼びて「ウエルフ」といふ鬨聲を發したり。コンラッドの兵も、亦之に應じ、王の弟フレデリックの生處を呼びて「ウエブリンゲン」といふ鬨聲を發したり。其後伊太利人、上の鬨聲を轉訛して「ゲルフ」及び「ギベリン」となし、以て法王黨と日耳曼帝黨との名稱に用ひたり。右は事の序を以て、説明し置きたるものなり。さてもフレデリックは、兵力を以て不服の諸州を壓倒せんと欲し、進んで伊太利に赴き、ミランの如きは、一旦之を蹂躙せしが、終に「ロンバルド」連合軍の爲に、レグナノの一戰、大敗に遇ひ、是に於てか千百八十三年、コンスタンスの

和議成り、伊太利北部の諸都府、自治の權利を得るに至れり。但し日耳曼帝主宰の權は、尚ほ依然として存在したるなり。フレデリックは、第三回十字軍の際、亞細亞に於て、溺死の運命に遇へり。(五十九頁に在り)

フレデリック二世在位の間、亦羅馬法王との爭絶えず、之が爲に、非人視の命の罰を蒙むること數次なり、從つて「ゲルフ」「ギベリン」の聲、伊太利國中に囂然たりき。帝は才智に秀で、藝能に達し、又數多の國語に通じ、鋭意文學技術を奬勵し、農商業の發達を計り、大に國家の利益を增進したり。然るにフレデリック二世の死するや、國力頓に衰微に赴き、諸の屬國皆解體の狀を呈し、帝の威權、日耳曼國内にも普及すること能はず、かくして千二百五十四年、「ホーヘンストウヘン」系統の絶ゆるに及び、諸侯皆暴威を振ひ、土地を掠め、良民を虐げ、選擧人等各其好む所を擁立して、有名無實の王位に即かしめ、一國實に紛擾を極めたり。かの諸都府が、相互の利

益を保護せんとて、「ライン」同盟、「ハンザ」同盟等を作りしは、即ち此際の事なりき。これ所謂大空位(「グレート、インテレグナム」)の時代にして、二十年の久しきに亘りしが、紀元千二百七十三年に至り、ハプスブルグ侯ルードルフ、終に選ばれて日耳曼帝となれり。ハプスブルグは、現時瑞西アールゴウ郡中の一地なり。ルードルフは、勇敢なる氣象と高尚なる心思を有せし人にして、熱心に國事に盡力し、社會の有樣をして、條緒に就かしめんことを計りたり。

ルードルフ在位の間、墺地利を以て其家の領地となしゝより、ルードルフの子孫、之を「ハプスブルグ」系統ともいひ、又は墺地利系統とも稱す。ルードルフより、一世を經て、其子アルバート一世、位に上り、又三世を經て、紀元千四百三十八年(後花園天皇永享十年)アルバート二世立ちしより、以後三百六十餘年間、墺地利系統連綿として、帝位に登り、以て紀元千八

百六年、佛帝ナポレオンが日耳曼帝國の組織を一變せし時に至る。但し此間日耳曼は尚撰擧王國に相違なかりしと雖も、選擧侯等常に墺地利系統を推して、位に即かしめたるなり。

アルバート一世より、二世に至るの間、有名なる二帝をチャールス四世及びシギスモンドとす。チャールス四世の時、勅令を發して、國内七名の大諸侯を以て、選擧侯と稱し日耳曼帝選擧の權を委托したり。七選擧侯とは、即ちメンツ、トレイブ、コーロンの三大僧正と、ボヘミヤ王、ライン伯、サクソニー公、ブランデンブルグ侯是なり。又帝の世に於ては、かのプレーグ大學の創立を見たり。シギスモンドの時には、有名なる、コンスタンツの會議起り、大に宗教上の事を改革せり。蓋し此際は、所謂大分派「グレート、シズム」の時代にして、耶蘇教國の中に三人の法王現れ、互に相競爭したるが爲に、人民の信仰に影響を及ぼすこと、鮮からざりき。紀元千四

百十四年、コンスタンスの地に於て、大會の開かれたる折は、日耳曼帝を始として、貴族僧侶、雲霞の如く參集し、種々評議の末、三人の法王を廢黜(ハイチエツ)し、新に法王を選立せり、之をマルチン五世といふ。ボヘミヤのヨヽハツスを火刑に處せしは、即ち此會議の爲しゝ所なり。

シギスモンドの後には、アルバート二世立ち、一世を經て、マキシミリヤシ一世位に即く、方に紀元千四百九十三年なり。帝は國會をウオームズに開き、大に國中に令して、一般の安寧を計り、私鬪の弊害を止めしめ、又「イムペリヤル、チエンバー」といへる法廷を設立したり。

○瑞西は、元來バルガンデー王國の一部にして、紀元千三十三年(フランコニヤ系統コンラッド二世の時)日耳曼國の版圖に入れり。尙第十三世紀の頃より、ハプスブルグ侯の勢力、此地方に盛なりき。然るに山間の三州、スウイツヽウーリ、ウンテルワルデンに於ては、人民殊に自由の精神

に富み、相共に一の連合を組織し、以て漸く他の羈絆を脫せんことを企てたり。ルードルフの子アルバート一世、日耳曼帝の位に上りしとき、瑞西人に對し、苛酷なる待遇を爲しゝかば、山人等今は其鋭氣を伏藏せしむることゝ能はず、乃ち起つて反旗を翻したり。墺地利の大軍之を征せしかども、紀元千三百十五年、瑞西のサーモピリー(希臘の一地にて、有名なる隘路なり。スパルタの兵、此地に於て、大に波斯の軍と戰ひたり、事は上古史に詳なり。)と呼ばれたるモルガルテンの隘路に於て、十分なる打擊を受けたり。爾來瑞西連合の州、次第に其數を增し、リユーセルン、ツーリツヒ、グラルース、ツヽグ、ベルン等前後相繼いで、同盟の中に加はるに至りぬ。かくして瑞西人は、千三百八十六年、センパックの戰に大勝を制し千三百八十八年、ナーフエルスに勝利を獲て、同盟國の根基漸く鞏固なるに至れり。第十五世紀の終に於て、日耳曼帝マキシミリヤン一世、この

嶋强なる山人を征服せんと計りしかど、其事成らず、瑞西の獨立終に日耳曼帝の許す所となれり。然れども公然と歐洲諸國の間に其獨立を認めらるゝに至りしは、紀元千六百四十八年ウエストフワリヤ條約の後に在るなり。

第二　佛蘭西

カペシヤン王統の初、數世の間、佛王の勢力誠に微弱にして、諸侯の跋扈甚しく、加ふるに英王の佛國内に領地を有すること、夥しかりき。然れども紀元千百八十年、フイリツプ、アウガスタス王位に即くに及び、佛國の運命、頓に一變したり。フイリツプは、漸く王家の勢力を盛にし、次第に近傍に領地を擴めしが、獨り英王の制し難きに苦み、常に其機會の至るを待ちしに、之を暫くして、英王ヨハン、惡意を恣にし、其姪にして佛國プリタニーの侯たるアーサーを殺害したるの罪、世上に露々たりしより、フ

イリツプは之を奇貨とし、ヨハンを佛國に召喚し、其所行の辯明を爲さしむ。ヨハン其命に從はざりしかば、フイリツプは、英王の佛國采地を有する權利は、既に滅絶せりと宣言し、終に英王より、ノルマンデーを始めとして、アンジユウ、メイン、ツーレン等の諸州を奪ひたり。但しアクイテイン及びガスコニーは、尙ほ英王の所有たりしなり。此の如くにして、フイリツプの勢力、益々强大に至りしかば、四隣の諸國之に驚き、英吉利王、日耳曼帝及びフランダーの諸侯等、同盟を結び、フイリツプを抑へんことを計りしかど、千二百十四年ブービンの一戰に於て、フイリツプの爲に大敗を取れり。

フイリツプより一世を經て、ルイ九世に至る。此王は、聖人の稱あり、紀元千二百二十六年位に即く。その人と爲り、溫良正直、常に慈仁を旨とし、公平を尙ぶ、而して又勇斷果毅の風を具へ、難局に當りて、曾て屈撓すること

なし。此王の時、法廷の組織に改良を加へて、人民の幸福を計りたり。されば其頃諸侯は、漸く其横行を止め、王權の發達殊に著しかりき。彼の十字軍最終の役に從ひしは、即ち此王なり。

是より又一世を經て、フイリップ四世に至る其即位は紀元千二百八十五年に在り。此王の時、英王エドワルド一世との戰爭あり、其軍費を辨せんが爲に、佛國内の寺領に課稅したり。法王ボニフェース八世、令を出だして、法王の許諾を經ずして、僧侶に課稅することを禁ぜしに、佛王は又之に對して、外人の佛國内に居住すること、及び金錢を佛國外に出だすことを禁じ、以て羅馬の僧侶を放逐し、且法王の利益に妨害を加へしかば、是に於てか、佛王と法王との間に、紛爭生じたり。此際佛王は、其身に勢力を添へんが爲に、始めて國會を開き、從前政治に參與せし貴族僧侶の外、平民にも此權利を得せしめたり。多年紛爭の後、法王の居都、終に佛國アビニョンの地に遷されて、新立の法王クレメント五世、全く佛王の屬隷なるが如き狀に至りぬ。爾來七人の法王、相繼いで、アビニョンに住し、其時限は紀元千三百九年より、千三百七十六年に至る、六十有餘年間なり。

願ふに前には、グレゴリー七世、日耳曼帝ヘンリー四世と爭ひ、大に權力を擴張したりしが、今やボニフェース八世、佛王フイリップ四世と爭ひ、歸する所法王の屈辱を致せり。一盛一衰、變化の繫る所、諸子胸中に銘記せらんことを望む。尚少しく進んで、教會の事を說かんに、紀元千三百七十六年に至り、法王グレゴリー十一世、アビニョンを去り、羅馬に赴き、幾程もなく死せしかば、伊太利にては、新に法王を選びしに、佛人亦別に法王を立て、是に於てか、耶蘇教國中に二人の法王を生せり。前節に所謂大分派の時代とは、是より始まりしなり。斯る弊事を一掃せんが爲に、紀元千四百九年ピサの會議起り、乃ち二人の法王を廢して、更に一人を選立せ

しかゞ、前の二法王其位を去るを肯んせざりしかば、遂に法王の數三人となるに至れり。ピサの會議に次いで起りしものは、即ちコンスタンスの會議なり、此會議の爲しゝ所は、既に述べたる如し、其後紀元千四百三十一年に於て、又宗教上の改革を計らんとて、ベールの地に會議の開かれたることあり。かくして羅馬教會の事、紛又紛、擾又擾、法王の權力日に益々限制を受け、以て第十六世紀宗教改革の時代に至れり。

さてもフイリップ四世は、外、法王の威を挫き、内、諸侯の力を破り、王權益々盛大に向ひたり。フイリップ四世の後、其三子相繼いで、王位に上りしが、最後の王チャールス四世に至り、嗣王と爲るべき男子なくして、死したり。元來佛蘭西の國法たる、女子に王冠を與ふることを許さゞるものなれば、是を以て、チャールス四世の從兄弟たるバロア侯、近親の故を以て、王位を承く、之をフイリップ六世とす、時に紀元千三百二十八年なり、

是に於てか「バロア」王統、「カペシャン」王統の後を承く、この「バロア」王統は、二百五十餘年間、佛國を支配したるものにして、其諸王の半數は、中世に在り。

「バロア」王統の始に於て、英國にては、エドワード三世之が王たり、フイリップ六世の立つや、エドワード三世は、佛の王位に即くべき權利あることを主張せしに、佛人斷然之を拒絶せしかば、兩國の間、戰爭斯に起り、紀元千三百三十七年より、千四百五十三年に彌れり、(後醍醐天皇延元三年より、後花園天皇享德二年に至る、)因て之を百年戰爭と稱す。但し此長戰はこの一百餘年間、絶えず干戈の動き、兵馬の倥偬(コウソウ)たるに非ずして、間々双方の疲倦(ヒケン)、其他の事情より、休戰の存するあり。而して此戰爭の際、英佛兩國の運命は、密着の關係を有すること實に甚しく、同一の事件にして、兩國の史上に重要なる形象を成すの場合、亦鮮少ならざるなり、百年戰

爭の事は、英國の條下に細說すべし。

百年戰爭の後ルイ十一世(紀元千四百六十一年位に即く)の時に至りては、封建の狀態大に減じ、中央集權の組織漸く備はり、國威四方に耀けり。王は機智敏慧にして、權謀術數に富めり、所謂戰國策士の資格に於て、全きものと稱すべきか。然れども約束を重んぜず、或る目的を達せんが爲に必要なるときは、如何なる詐僞手段にても、之を取るを憚からず。德義の上より見れば、大に非難すべきものあるなり。但し王善く國を治め、道路を作り、溝渠を整ち、製造を盛にし、敎育を務め、當時內政の整頓大に觀るべしとす。

此王の時、バルガンデー公國(同名の王國とは、全く別なり、佛國の東邊中部に在り、强大なる勢を現し、次第に四隣を蠶食し、終に現今の白耳義及び和蘭をも、併せ領するに至り、殊に其主チャールスは、勇悍にして、又文

治の才を兼ね、夙に大志を抱き、佛王をも凌駕せんと欲したり。ルイ王之を制せんと計りしかど、皆て一旦其術中に陷り、俘囚の身と爲り、種々の恥辱を蒙り、辛うじて生命を全うしたることありき。然るにチャールスは、瑞西の征服を企て、山人の爲にグランソン及びモラット(共に瑞西の地名)に於て、大敗に遇ひ、尙はロルレイン公とナンシー(ロルレインの一地)に戰ひしに、瑞西人、公の援兵として來り、バルガンデーの兵、復た全く潰ゑ、チャールス其人も、亂軍の中に數創を受け、一沼中に凍屍を殘すに至りぬ。ルイの勁敵既に斃れしかば、王は今や恐るゝ所なく、直に兵力を以て、バルガンデー公國を奪ひたり。然れども白耳義及び和蘭、即ち所謂チザーランド(低地といふ意)は、チャールスの女なるメーリー、尙は之を支配し、後年その日耳曼帝マキシミリヤン一世と結婚するに至り、領地を擧げて墺地利家の有に歸したり。

ルイ十一世死して、チャールス八世位に即く、時に紀元千四百八十三年なり。王はブリタニーの女主、アンと結婚して、其公國を併せたり。是に於てか、英吉利海峽とピレニース山との間なる數多の封建諸國、全く一王の下に合するに至り、佛國の勢益盛大に向へり。チャールス八世の時には伊太利征伐の擧あり、こは近世史の初に說かん。

第三　英吉利

さても紀元千六十六年、ノルマンデー公ウイリヤムは、英王の位に即きたり、之を「ノルマン」征服といふ、此事件より生せし著しき結果と謂ふべきものは、英佛の交渉なり。ウイリヤムは英國にては、君主の位に在りと雖も、ノルマンディ公の資格を有するを以て、佛王より之を觀るときは、一の臣下に過ぎず。されば、ウイリヤムは、佛王に服事せんか、英王たる地位を辱むるを如何にせん。又佛王は、ウイリヤムの英王たるを重んじて、

之を不問に付せんか、そのノルマンディ公たるを如何にせん。これ實に英佛の關係をして錯雜ならしむる所以の原因にして、後來種々の難事を生すべきは、復た疑を容れざる所なり。是を以て佛王は、屢々その勢力强大なる臣下と爭端を開き、又英王は、同時に佛王と分離し、しかのみならず、其國を征服せんとせしこともあり、かくて兩國の葛藤、頻に起り、兵戈の慘その幾回なるを知らず。英王の全く佛國に根據を失ひしは、實に「ノルマン」征服の時より、殆ど五百年を經過したる後(紀元千五百五十八年女王メーリーの時)に在るなり。

ウイリヤム一世の子孫、相繼いで英王となりしもの、三人あり、ウイリヤム二世といひ、ヘンリー一世といひ、スチーブンといふ、紀元千百五十四年スチーブン死して、ヘンリー二世位に即く、之を「プランタジネット」王統の始とす。ヘンリー二世の父は、佛國のアンジヨフ侯ジヨフレイにし

て。ヘンリー一世の女マチルダ、之に嫁せり。ヘンリー二世は、又佛國ルイ七世離縁の后なるエリーノルと結婚し、妻の權利を以てポアトー及びアクイテイン（共に佛國西南部の地名）を併せ領するに至れり。されば當時英王の佛國内に領地を有すること廣大にして、佛王は之に對して、殆ど顔色なき程なりき。

是より先きスチートプンの時、政令弛廢し、諸侯暴横至らざる所なく、處々の堅固なる城堡は、唯だ盜賊の巣窟たるが如き狀を呈し、人民皆その剣嚥擅奪（ヒイシヤロダツ）、飽くなきの欲に苦しみ、伸べて訴ふる所なく、俯して匿るゝ所なく、不幸の境涯に沈淪すること甚しかりき。ヘンリー二世は、大に一國の秩序を整理し、諸侯の跋扈を制壓し、又各地に裁判官を派遣して、訟を斷じ、冤を伸べたり。其頃各地に於て、若干の人を擧げ、虚言を吐かざるの宣誓を爲さしめ、其人々の陳述を聽いて、斷訟の資料を爲すの習起り、この

習よりして、所謂陪審の制度は發せしものなり。

ヘンリー二世は、愛爾蘭を征服せんことを企て、羅馬法王の許可を受け、諸侯をして往いて之を攻略せしめしに、軍よく功を奏し、千百七十一年王自ら愛爾蘭に至りしとき、島國南部の酋長、皆王の前に臣屬の禮を取れり。然れども北部地方は、尚ほ獨立の狀態を維持し、南部地方も亦叛服常ならず。全島の征服は、此時より後るゝおよそ、凡そ四百年エリザベス女王の世に在り。

ヘンリー二世の子、リチャード一世は、獅心の稱あり、第三回十字軍に從ひ、勇名を顯はしゝは、實に此王なり。其弟ジョン次いで立つ、ジョン王暴戾にして、其意の欲する所に從つて、苛重なる租税を徵收し、貧民を害し、富者を掠め、殘酷の所行實に甚しく、財を强取せんとて、人を捕へ、毎日一齒を拔くに至る。同時にジョン王は、カンターバリー大僧正任命の事よ

り、法王インノセント三世と爭を生じ、其結果法王に屈從し、英國及び愛爾蘭を法王に捧げ、その臣下となりて、國土を受け、毎年貢賦を羅馬に致すべきを誓約したり。既にして王の虐政堪ふること能はず、貴族の輩乃ち起ちて、反抗を試み、軍勢を以て王に迫り、終に紀元千二百十五年六月十五日(順德天皇建保三年)テームス河の一小島に於て、「マグナカルタ」(大憲章)を承認せしめたり。蓋し此大憲章たるや、英國從來の習慣法律を回復せしまでにて、新に特權を國人に許可せしにあらず。されど前代の習慣法律、斯に集蒐せられて、憲章の中に井然たり、就中その明文によりて、二箇の大義、判然確定せられたるを見る。曰く國王は、臣下の同意を經ずして、妄に金錢を徴收することを得ず。曰く國王は、法律上正當の手續を履まずして、妄に人民を禁錮し處罰することを得ず。二箇の大義とは、即ち是なり。要するに此大憲章は、實に英國人民自由の基礎たることを記

臆せざるべからず。

ジョン王の子、ヘンリー三世に至り、失政多く、貴族の輩不滿の念を生じ、干戈の變乃ち起り、レイスター伯シモン、デ、モントフォルト貴族の首領となり、王とルーエスに戰ひ、之を敗れり。是に於てかシモン、デ、モントフォルトは、一國の實權を掌握し、國王を擁して、新に國會を召集し、貴族僧侶の外、更に「ナイト」及び市民にも參政の權を得せしめたり、之を下院議員の嚆矢とす、時に紀元千二百六十五年なり。

エドワード一世次いで立つに及び、ウエールスの君レウエリンを降し、其國を取りて領地となし、又蘇格蘭の王バリオルと戰ひ、之を擒にし、其國を戡定したり。然れども蘇國人回復を計るの念甚しく、ウイリヤム、ワレースを推して、大將として、英王に抵抗し、戰全く利を失ひ、ワレースは龍動に處刑を受くるに至りしかど、蘇國人尚ほ其志を屈せず、又ロバー

ト、ブルースを國王とし、再擧を圖りしかば、英王復た軍を率ゐて、征伐に向ひ、未だ國境に達せずして、病死したり。嗣王エドワード二世の時、ロバート、ブルースの勢、漸く盛なりしかば、英王之を壓せんが爲に、蘇國に入り、紀元千三百十四年バンノックバルンに於て、大戰を爲し、其結果英軍の全敗となれり、是を以て其後千三百二十八年、エドワード三世の時、終に蘇國の獨立を許したり。

佛國カペシャン王統、最後の王なるチャールス四世、死して其後を承くべき男子なし。英王エドワード三世の母は、佛王フイリップ四世の女、イサベラなるにより、英王は正にチャールス四世の甥に當れり。然るに佛人、前王の從兄弟たるフイリップ六世を立つるや、英王は己れ最近の親屬たる故を以て、佛國の王位を要求せしに、佛人之を拒んで曰く、イサベラは、既に國法によりて、王位に即くこと能はざるなり、豈に自己の有せざる權利を他に傳ふるを得んやと。英佛の紛議斯に起り、百年戰爭因りて發したり。此戰爭の間、英佛兩國の諸王を擧ぐれば、左の如し。

英國	佛國
エドワード三世(一三二七年即位)	フイリップ六世(一三二八年即位)
リチャード二世(一三七七年即位)	ヨハン二世(一三五〇年即位)
ヘンリー四世(一三九九年即位)	チャールス五世(一三六四年即位)
ヘンリー五世(一四一三年即位)	チャールス六世(一三八〇年即位)
ヘンリー六世(一四二二年即位)	チャールス七世(一四二二年即位)

かくて紀元千三百三十七年、エドワード三世兵を率ゐて、佛國に侵入せり。クレシーの戰に於て、英軍大勝を得、次いでカレイの要港、英人の有に歸す。然るに千三百四十七年より、五十年まで、劇烈なる惡疫、東洋より歐洲に傳染し來り、伊太利佛蘭西等其害を被ること夥しく、延いて英蘭に

及び、其國の人口半數を斃したり。戰爭の情も、一時之が爲に中止せられしが、千三百五十六年、ポアチエーの戰起り、此時黑太子(エドワード三世の子、戰中常に黑き甲冑を着くるを以て、此名あり)寡少の兵を以て遂に佛の大軍を破り、ジョン王を擒にして、英京龍動に引致せり。踰えて數年ブレテニーの條約成り、英王は佛の王位に對する要求を放棄し、佛王はアクイテイン及びカレイ等の純然たる所有權(即ち封建采地として、所有するに非ず)を英王に許したり。其後佛王チャールス五世ブレチニーの條約を破り、兵を起して、アクイテインの大半を奪ひしかば、是より戰端再び開け、紛々たること多年、此間英國にては、リチャード二世、人望を失ひ、已むを得ずして位を去るに至り、ランカスター王統のヘンリー四世其後を承く。ヘンリー四世次いで立つに及び、當時佛王チャールス六世心狂し、且其國內訌分裂の憂あるに乘じ、又たエドワード三世の要求

を唱へ軍を率ゐて、佛國に侵入せり。千四百十五年アヂンクールの一戰は、クレシーおよびポアチエーと同樣なる結果を呈し、佛軍全く敗績せり。故に千四百二十年トロエーの條約成り、英王ヘンリーは、チャールス死去の後、佛王の位に登るべきの議を定めたり。ヘンリー及びチャールス、同年に沒せしかば、英王ヘンリー六世、佛王の位に登り、年尙ほ幼少なりしを以て、ベッドフォルド公ジョン、佛國の政を攝せり。時にチャールス七世、佛國南部に於て、人民の奉戴する所となり、王號を稱し、國運を挽回せんことを計りしかど、南風競はず、ベッドフォルド公強大なる兵力を以て、次第に之を制し、終にオルレヤン府を圍攻せり。此府は、佛王の黨が、最後の防障と依賴せし所なるに、その沒落、今や旦夕に迫れり。この危急存亡の秋に際し、天一女子の手を假りて、佛國の覆滅を救ひたり、ロルレインのドムレミー村に、ヂヤンダルクといふ女子ありき。元來敬神の念

に富み、又忠君愛國の心深く、夙に英人の跋扈(バッコ)して、國事の日に非なるを慷慨せしが、この時奮然として起ち、チャールス七世の委任を受け、一隊の軍を率ゐて、直にオルレヤン府に至り、英兵を退けたり。(千四百二十九年)デヤン、ダルクは、幾程もなく英軍の擒にする所となり、殘酷(ザンコク)なる處刑に遇ひしかど、是より佛國の運命俄然として一變し、チャールス七世の軍、到る處に其功を奏し、紀元千四百五十三年英人の大敗を以て、百年戰爭終局を告げたり。是に於てか佛國内に於ける英の領地は、僅にカレイ一港のみとなるに至れり。

暫時にして英國は、内亂の爲に苦しめられたり。ヘンリー在位の際、「ブランタジネット」王統の支派なる「ヨーク」家王位を得んと欲し、「ランカスター」家と爭端を開けり。「ヨーク」家の黨は、白薔薇を用ひ、「ランカスター」家の黨は、紅薔薇を用ひて、徽章(キショウ)を爲しゝかど、世之を薔薇の亂と稱せり。此亂は紀元千四百五十五年より千四百八十五年まで、三十年に亘(ワタ)り、其間實際の戰爭は、三年に過ぎずと雖も、極めて劇烈(ゲキレツ)なりしを以て、有名なりき。

紀元千四百六十一年、「ヨーク」家、勝利を得て、「エドワード」四世、王位に登り、エドワード五世、及びリチヤード三世に傳へしかども、ボスウオルスの一戰に於て、「ランカスター」家なるヘンリー、チエードル、大にリチヤードを破り、王位を取れり、之をヘンリー七世とす。「チユードル」王統、此に始まる。顧ふに此内亂の著しき結果は、封建制度の滅亡なり、隨て王權の擴張之に伴へり。三十年の間、王族の死するもの八十、貴族の沒するもの二百に上れりといふ。されば、ボスウオルスの野は、是れ封建制度の破壞を記憶せしむる一標跡(イッピヤウヒキ ひとつのしるし)とや謂ふべからむ。

第四　伊太利

伊太利(イタリ)は、オツト大帝以來、日耳曼の版圖に入りしが、フレデリック一世

の時、北部の諸都、連合して「ロンバルド」同盟を作り、以て日耳曼帝に抵抗を試み、戰爭連年、終に白治の權利を得るに至りしは、既に前節に說けるが如し。爾來「ゲルフ」「ギベリン」の聲半島内に囂々たること、數十百年に亘り、而してその間、數多の都會、其商工業を以て、次第に殷富隆盛を致し、勢力强大なる有樣を現したり。かの兩シヽリー王國は如何といふに、ホーヘンストーヘン系統のヘンリー六世(フレデリック二世の前代なり)の時、日耳曼の所領となり。紀元千二百六十六年、佛國アンジュ侯チャールスの支配に歸せり。然れども佛人の虐政を施こすと甚しきより、シヽリー島の人民之に堪へず、一旦機會に乘じて、盡く島中の佛人を殺戮し、チリブルスと分離して、別にアラゴン(西班牙の一國)に屬せしが、紀元千四百三十五年に至り、アラゴン王アルフォンゾ五世の時、兩シヽリーを合して之を治めたり。

さて又第十四世紀の大半は、法王居を佛國アビニョンに遷し、その命令羅馬に行はれず、府内には、豪族各其党派を立て、互に相紛爭して、人心爲に恟々たりき。是時に方りリエンヂといふものあり、身賤家に生れしと雖も、心高尙を持し、慨然として古羅馬共和政の美を回復せんとの大望を起し、終に其才智と雄辯とを以て、人心を收攬し選ばれて「トリビユン」(民長と譯す、古代史に詳なり)となり、次第に羅馬をして舊時の面目を呈せしめんとしたり。リエンヂ「トリビユン」となり、一時勢威熏赫其名四方に轟きしかば、忽ち驕慢の念を生じて、民心の離畔を招き、其極この最後の「トリビユン」は、街路に於て、横死の禍に罹るに至れり、時に紀元千三百五十四年なりき。

中世伊太利の都會中、有名なるものをベニス、ゼノア、フロレンス及びピサ等とす。而して以上の中重なるものは、ベニス及びフロレンスなり、今

此二都に就て述ぶる所あらんとす。

○ベニス府の起原は第二章に說けり。此府の人民は、地勢の便により、次第に商業航海に從事せしが、殊に十字軍の際には、其船舶を以て、兵士を載せ、大に利益を得たり。此時より、其領地も漸く加はり、地中海上處々に屬地を見るに至れり。蓋しベニスの船舶は、常に東洋より絹帛、香料、寶玉等を輸來して、之を歐洲諸國に販賣せり。商業と共に工業も、亦盛大なりき。此府の政体は、數百の貴族中より、若干の元老議員を選出し、其元老議員中より、一人の行政長官(ドーヂ)といふ)及び十人の閣員を選出するの組織なり。この十人の閣員、終に政治の全權を握り、暴虐至らざる所なく、商業の運命も、亦この少數壓制の下に少からざる影響を蒙りしが、バスコデガマ喜望峰を周航し、印度に向つて、新路を發見せし以來、東洋貿易の競爭者續々現はれ、ベニス商業頓に地に墜つるに至れり。

○フロレンスの府民は、商業製造に熟練し、其玉工、織工及銀行者は大に府の名譽と財力とを增加し、第十三世紀の頃より、伊太利内に首要なる地位を有するに至らしめたり。此府は中世のアゼンスと稱せられ、民主政体を以て著はる、後年に至り、府内黨派の爭を以て攪擾せられしが、紀元第十五世紀の間、「メデチー」家起り、次第に勢力を得て、一府の事を左右するに至れり。但し政体は、依然として舊慣に率ひ、毫も變更する所なかりしなり。コスモ、デ、メデチーは、國父と呼ばる。最も有名なるものは、ローレンゾ、デ、メデチーなり。フロレンスに於て、文學技術の進步、他に卓越したるは、主として此人の力に歸せざるべからず、彼の文學の大家なるダンテ、ペトラルク、ボッカチオ、理學を以て有名なるガリレオ、畫工たり、彫刻家たるミケール、アンヂエロ、レオナルド、ダ、ビンチ等の如き、實にフロレンスの府民なりとす。

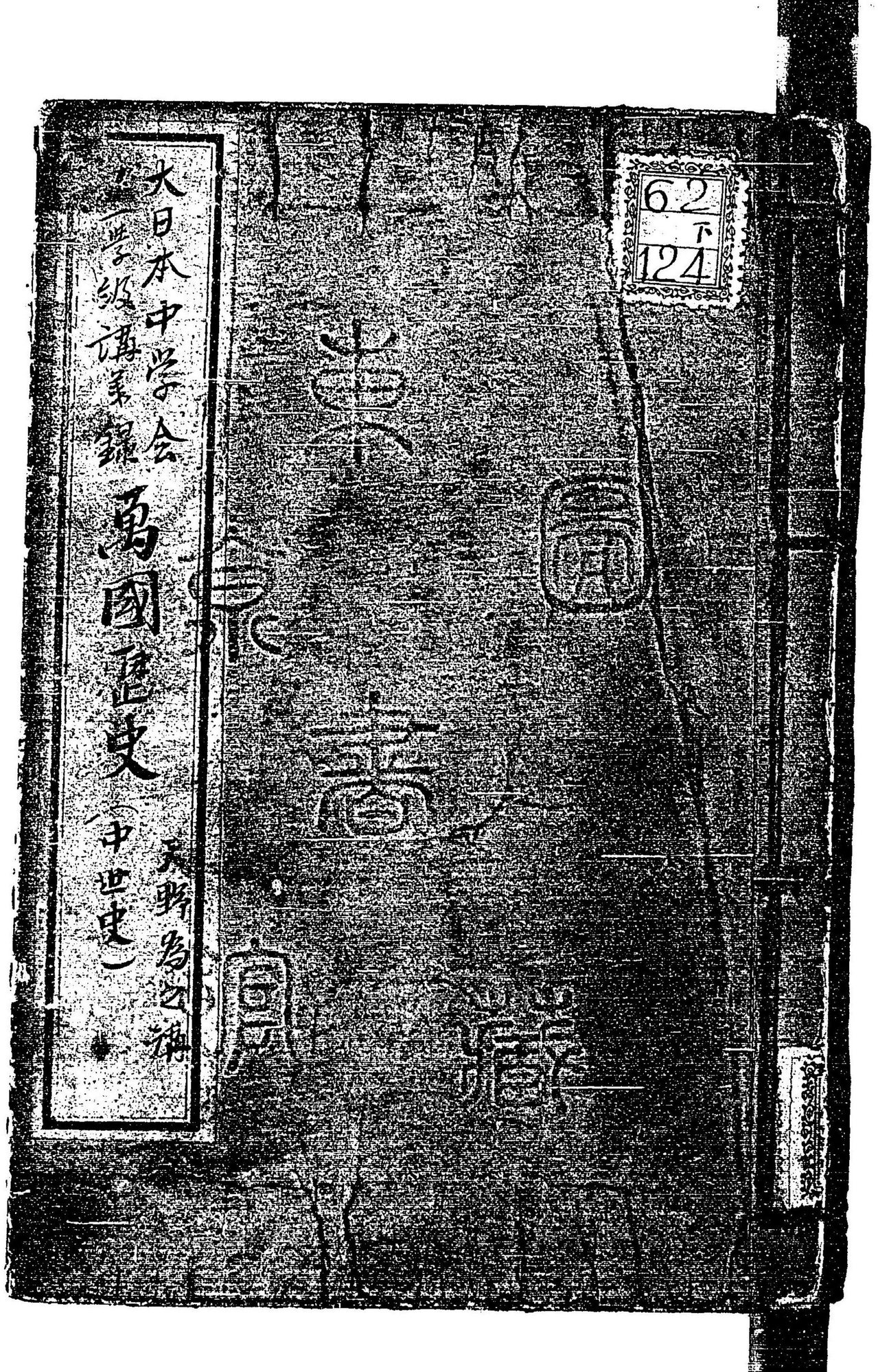
第五　西班牙及び葡萄牙

第二章に於て述べし如く、「ムール」人の亞弗利加より西班牙に來り、斯に半島の南部に「ムール」王國を建つるや、北部にはナバール、アラゴン、カスチル、レオン等の耶蘇教國あり、「ムール」人と此等の諸國との爭、常に絶えざりき。耶蘇教國の中、アラゴン及びカスチルの二者、漸く强大を致し、千二百三十年には、カスチル終にレオンを併せたり。アラゴン、カスチルに於ては、夙に自由の制度を用ひて、人民の幸福を進め、國會は「コルテス」と稱し、貴族僧侶及び府民の三者を以て之を組織し、立法課稅の權利、一切此に存せり。

既にして「ムール」王國の版圖次第に縮少し、第十三世紀の終には、僅にグレナダの一洲に止まるに至れり。紀元千四百六十九年アラゴンの王子フエルヂナンド、カスチルの王女イサベラと結婚せしより、幾程なく兩

國の合併を成就して、一大王國の基礎を建て、加ふるに此際智略に富める宰相カーヂナル、ヲメチスありて、善く內外の政務を處理したり。かくして、「ムール」人征伐の兵鋒益鋭く、十年間の戰爭を以て、「ムール」人最後の根據地たるグレナダ府陷落に至れり。時に紀元千四百九十二年にして、かの有名なるコロンブスが、亞米利加を發見せしも實に同年の事なりき。

中世史　終



62
下
124

202334-000-9

62—124下

万国歴史

天野　為之／述

刊年不明

EDC-0232